



クズマ遺跡第2次発掘調査報告書

平成11年度

倉吉市教育委員会

クズマ遺跡第2次発掘調査報告書



遺跡略号 4DKK-2

平成11年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572858

序

この報告書は、平成11年度に個人の農地造成に伴い、倉吉市上神字クズマにおいて実施した埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

鳥取県の中部に位置する倉吉市は、数多くの優れた文化財を伝えています。その中でも、本遺跡の所在する上神地区は、数多くの遺跡とともに、出土品が国の重要文化財に指定された谷畠遺跡など、祭祀遺跡が密集することで注目されています。

今回の調査地は上神古墳群の中に位置し、丘陵上の古墳の他に、狭い調査範囲ながらも、竪穴式住居・掘立柱建物・溝状遺構など多数の遺構が確認されました。古墳からは多量の土器とともに土製動物形などの祭祀遺物が出土し、上神地区の特色である祭祀遺跡に新たな一例を加えることができました。

この報告書が文化財の理解・活用のための一資料としてお役に立てれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた土地所有者の山崎彰子氏・工事施工者の駒井商店、ならびに関係各位に対し深く感謝の意を表するものです。

平成12年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足羽一昭

例 言

1 本報告書は、個人の農地造成に伴う事前調査として、平成11年度に倉吉市教育委員会が国・県の補助を受け倉吉市上神字クズマ1116-2において実施した発掘調査の記録である。

2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団 長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調査員 根鈴 鞠雄（倉吉博物館主任学芸員） 森下 哲哉（文化財係主任）

根鈴智津子（文化財係主事） 加藤 誠司（文化財係主事）

岡本 智則（文化財係主事） 岡平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子

事務局 波田野頌二郎（教育次長）

眞田 広幸（文化課課長） 藤井 覧（文化財係係長）

藤井 敬子（文化財係主任） 山崎 昌子（文化財係主事）

金田 朋子（臨時職員）

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松嶋あつ子・竹歳 晚子・山本 鑑

3 現場の調査・写真撮影は岡平が行った。

4 図面整理は岡平・山根・松田が、遺物整理は岡平・泉・世浪・妻藤・松嶋・竹歳・山本が行った。遺物実測は岡平・森下・根鈴・加藤・岡本・山根が行った。遺物写真撮影は岡平が行い加藤が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が行った。

5 遺構測量のための基準点測量を中央技研株式会社に委託した。

6 本書の執筆は各調査員が討議し、第III章 2 遺物は加藤が、土器観察表は岡平・岡本、その他は岡平が行った。編集は岡平・松田が行った。

7 第1図は、建設省国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成9年修正測量の1:2,500国土基本図「倉吉市平面図」を使用した。

8 掘図中の方位は国土座標第V座標系の北を指す。

9 遺物に付した記号・番号は、本文・掲図・図版で統一している。

10 調査によって得られた資料は、倉吉博物館で保管している。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	2
1	遺構	6
2	遺物	20
IV	まとめ	34
報告書抄録		

挿図目次

第1図	周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	クズマ遺跡2次調査区位置図	4
第3図	クズマ遺跡2次遺構全体図	5
第4図	1号墳調査前地形測量図	6
第5図	1号墳遺構図	7
第6図	奈良期壇・竈・土製支脚・土製模造品分布状況図	10
第7図	奈良期壇集中部平・断面図	11
第8図	1号・2号住居、2号段状遺構遺構図	12
第9図	1号掘立柱建物、1号・2号柵列遺構図	13
第10図	1号・2号溝状遺構遺構図	15
第11図	1号段状遺構、1号貯蔵穴、1号・3号・4号土壤遺構図	17
第12図	2号土壤遺構図	18
第13図	土器溜断面図	19
第14図	祭祀遺物	21
第15図	1号墳周溝上層出土遺物1	23
第16図	1号墳周溝上層出土遺物2	25
第17図	1号墳周溝下層出土遺物1	26
第18図	1号墳周溝下層出土遺物2	27
第19図	2号住居、1号掘立柱建物、1号・2号柵列出土遺物	29
第20図	1号・2号溝状遺構、1号段状遺構出土遺物	31
第21図	1号貯蔵穴、1号土壤・土器溜・遺構外出土遺物	32
第22図	鉄製品、玉類・石製品	33

図 版 目 次

- 図版1 遺跡 調査前全景 調査後全景
図版2 遺構 1号墳 1号墳周辺
図版3 遺構 奈良期壇集中部
図版4 遺構 不明土製品出土状況 土製馬形出土状況 土製馬形・猪形出土状況
図版5 遺構 土製筋縫車出土状況 1号墳北断面 調査区北壁
図版6 遺構 1号住居 2号住居 2号住居貼床
図版7 遺構 1号掘立柱建物、1号・2号柵列 1号住居・2号柵列検出面 2号柵列P5・P6断面
図版8 遺構 1号・2号溝状遺構検出面 1号・2号溝状遺構完掘
図版9 遺構 1号・2号溝状遺構断面 1号・2号溝状遺構P3・P4・P5断面
図版10 遺構 3号溝状遺構断面 1号段状遺構 1号段状遺構断面
図版11 遺構 1号貯蔵穴 1号土壤
図版12 遺構 2号土壤 2号土壤断面 3号土壤半裁
図版13 遺構 4号土壤 土器溜
図版14 遺物 土器
図版15 遺物 土器
図版16 遺物 土器
図版17 遺物 土器
図版18 遺物 土器
図版19 遺物 土器
図版20 遺物 土器
図版21 遺物 土器・玉類・鉄製品
図版22 遺物 石製品

I 発掘調査に至る経過

平成10年9月、鳥取県文化財保護指導委員川本充氏より、倉吉市教育委員会文化課に倉吉市上神字クズマ1116-2で立木の伐採が行われているとの連絡があった。ただちに現地を確認し、開発業者に確認を取ったところ、土地所有者山崎彰子氏に依頼を受け農地造成工事を行うとのことであった。現地は周知の遺跡である上神古墳群の中に位置し、開発予定地内にも古墳状の高まりが認められたため、土地所有者及び開発業者と協議を行った。現地は松林で、病害虫などにより立木が枯れたため農地として再利用する予定であり、現状のままでは丘陵及び斜面のため農作業の効率が悪く、是非とも丘陵を削平して農地造成を行いたいとのことであった。そこで発掘調査が終了するまで開発を中断し、平成11年度に倉吉市教育委員会が国・県の補助を受け発掘調査を行うこととなった。現地調査は平成11年5月26日から平成11年11月15日まで行い、調査面積は570m²であった。

II 位置と歴史的環境

クズマ遺跡は、倉吉市街地から北西に約4km離れた倉吉市上神字クズマに所在する。調査地は倉吉市と北条町との境にある蜘蛛ヶ家山（標高177.1m）から南西に樹枝状に派生した丘陵のはば末端部、北西から南東に谷筋に突き出した丘陵尾根筋から南斜面部分である。標高は37~42mで、付近の水田面との標高差は約20mである。1次調査(21)の調査地は今回の調査地から南に浅い谷を隔てて約100m離れている。1次調査は昭和60年に行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居30棟と古墳時代後期の円墳9基が調査されている。そのなかで、6世紀中頃に築造された古墳の周溝上面から7世紀後半の土器と共に土製人形1点・土製馬形12点の他、手握土器・竈・土製支脚・甕などが出土している。また、2次調査地から南東に約170m離れた同一丘陵先端部には217点にも及ぶ土製人形・馬形などが採取されたイガミ松遺跡(22)が所在する。

蜘蛛ヶ家山と四王寺山に挟まれた上神地区周辺は、倉吉市でも有数の遺跡が密集する地域である。上神51号墳(19)墳丘盛土で細石刃石核が出土するなど、その始まりは旧石器時代に及ぶことが明らかになっている。縄文時代では、取木遺跡(29)の竪穴式住居・平地式住居と焼石群、イキス遺跡(28)の落し穴などが、弥生時代前期ではイキス遺跡の土壙墓群が知られる。弥生時代中期では、西前遺跡A地区(49)で竪穴式住居が確認されている他、蜘蛛ヶ家山の東側にある北条町米里では銅鐸が出土している(51)。弥生時代後期以降、それまでに比べ遺跡の数は増加する。集落としてはクズマ遺跡1次・桜木遺跡(25)・上神宮ノ前遺跡(26)・夏谷遺跡(55)が、墳丘墓は四隅突出型墳丘墓の可能性がある柴栗古墳群(41)内の墳丘墓・墳丘に貼石をもつ可能性のある三度舞墳丘墓(42)が知られる。

古墳時代では、集落はクズマ遺跡1次・桜木遺跡・西山遺跡(23)・貓山遺跡(39)・西前遺跡(49・50)・夏谷遺跡などが調査されている。前期の古墳は、彷彿の三角縁神獸鏡・変形六獣鏡・碧玉製錐形石・滑石製琴柱形石製品が出土した上神大将塚古墳(40・円墳・直径30m)、大谷大将塚古墳(44・前方後円墳・全長50m)がある。また、カスガイ状の周溝を持つ方墳群が猫山遺跡・中峰古墳群(57)で確認されている。古墳時代後期になると、調査地周辺の丘陵上に古墳群が形成される。クズマ遺跡の所在する蜘蛛ヶ家山を中心とした丘陵上にも、総数230基ともいわれる上神古墳群(15)をはじめ穂波古墳群(14)・原古墳群(1)・曲古墳群(3)・北尾古墳群(7)・島古墳群(8)などが知られている。また、沢ベリ遺跡(59)・イザ原古墳群(46)・小林古墳群(45)など、平野部に近い低丘陵上にも古墳群が形成されることが明らかになっている。調査地周辺の発掘調査例を見ると、東隣の丘陵上にある西山遺跡の古墳群は5世紀以降、クズマ遺跡1次調査地の古墳群は6世紀以降の造営であることが明らか

にされている。西山遺跡は、独立丘陵上に同じ時期の集落と古墳群が存在し、また、東隣の谷部分に存在する祭祀遺跡である谷畠遺跡(24)とあわせて6世紀代の生・死・祀りといった生活全般をうかがい知ることのできる遺跡群として注目される。終末期の古墳は、取木遺跡・一反半田遺跡(30)・両長谷遺跡(34)などで確認されている。

7世紀中頃創建の大御堂廃寺を始めとして、7世紀後半の大原廃寺・8世紀の石塚廃寺など当地方にも古代寺院が建立される。このうち、大御堂廃寺は銅製題・非常に精巧な造形の銅製頭部・多数の埴仏や塑像・160点以上の墨書き器など充実した遺物をもち、地方寺院としては珍しい觀世音寺式と考えられる伽藍配置を取るなど本格的な古代寺院であったことが判明しつつある。また大原廃寺は、講堂を西側に寄せた変形の法起寺式伽藍配置をとり、一間四面堂に形を変えながら中世まで存続したことが判明している。

8世紀後半には、四王寺山の南側、通称久米ヶ原丘陵先端部の丘陵上に、伯耆国衙・伯耆国分寺・伯耆国分尼寺(法華寺遺跡)が隣接して造営される。これらの遺跡群から約400m北東の低丘陵上には伯耆国の物資収納施設である不入岡遺跡が存在する。

平安時代には、四王寺山山頂に四天王像を安置し修法を行ったとされる四王寺(36)が建立される。

古墳時代終末期から奈良・平安時代にかけての集落は西前遺跡・平林遺跡(60)などが知られている。また、クズマ遺跡から東に約650m離れた浅い谷部に古墳時代後期から奈良時代にかけて土器や祭祀遺物を廃棄したと考えられる上神宮ノ前遺跡が存在する。奈良・平安時代以降の墳墓はほとんど分かっていないが、長谷遺跡で横穴式石室を模した石棺内に土師器の藏骨器2個を合葬した火葬墓が見つかっている。

III 調査の概要

調査地の基本的な層序は、上からI褐色土(表土)、II茶褐色土、III淡褐色粘質土(ソフトローム層)、IV黄褐色砂質土(ホーキ層)、V橙褐色粘質土(疎混じり粘質土層)、VI' 黄褐色土(VI層起源の土か。きめ細かく軟質)、VI黃褐色土(大山・倉吉軽石層)、VII白灰色粘質土である。I・II層は遺物包含層でIII層以下は地山であり、遺構検出は基本的にI・II層を掘り下げた後行った。調査地の地形は丘陵頂部から浅い谷部であるため、III・IV層は丘陵頂部にわずかに存在するのみで、斜面部分での遺構検出面は主にV層上面である。また、調査区南側の斜面部分にはII層の下に同じく遺物包含層であるII' 茶褐色土(II層よりもかなり硬い)が存在する。その下層には浅い谷地形が、大山上部火山灰であるクロボクに由来すると考えられる黒色土で埋没した様子が認められた。そのため、調査区南側はI・II層を掘り下げた時点、II' 層を掘り下げた黒色土の上面、黒色土を掘り下げたV層上面の3回遺構検出を行った。

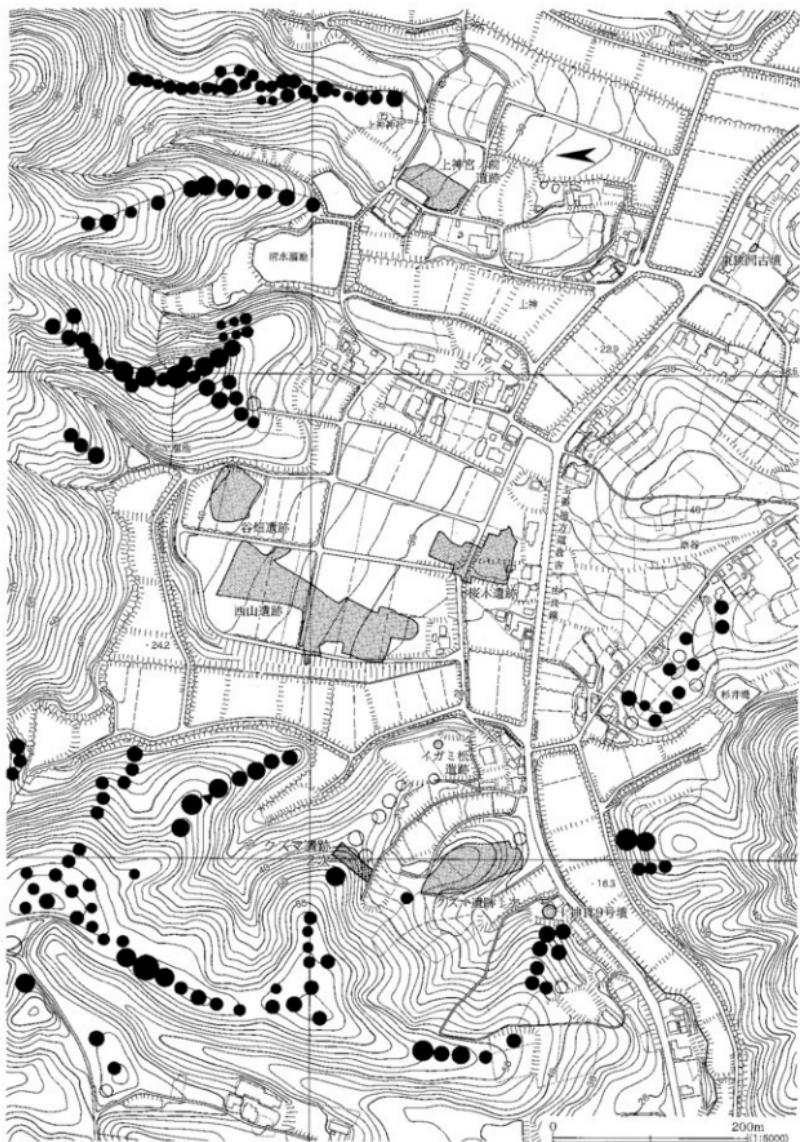
調査の結果、古墳I・竪穴式住居2・掘立柱建物1・棚列2・溝状遺構3・段状遺構2・貯蔵穴1・土壙4・土器窯1を検出した。

1 原古墳群	8 島古墳群	15 上神古墳群	22 イガミ松遺跡
2 曲管峯長谷遺跡	9 島薙山遺跡	16 上神44号墳	23 西山遺跡
3 曲古墳群	10 堤屋敷遺跡	17 上神45号墳	24 谷畠遺跡
4 曲宮ノ前遺跡	11 北尾遺跡	18 上神48号墳	25 桜木遺跡
5 曲第1遺跡	12 島遺跡	19 上神51号墳	26 上神宮ノ前遺跡
6 曲岩下遺跡	13 曲226号墳	20 上神119号墳	27 伯尾山窯跡
7 北尾古墳群	14 穂波古墳群	21 クズマ遺跡1次	28 イキス遺跡

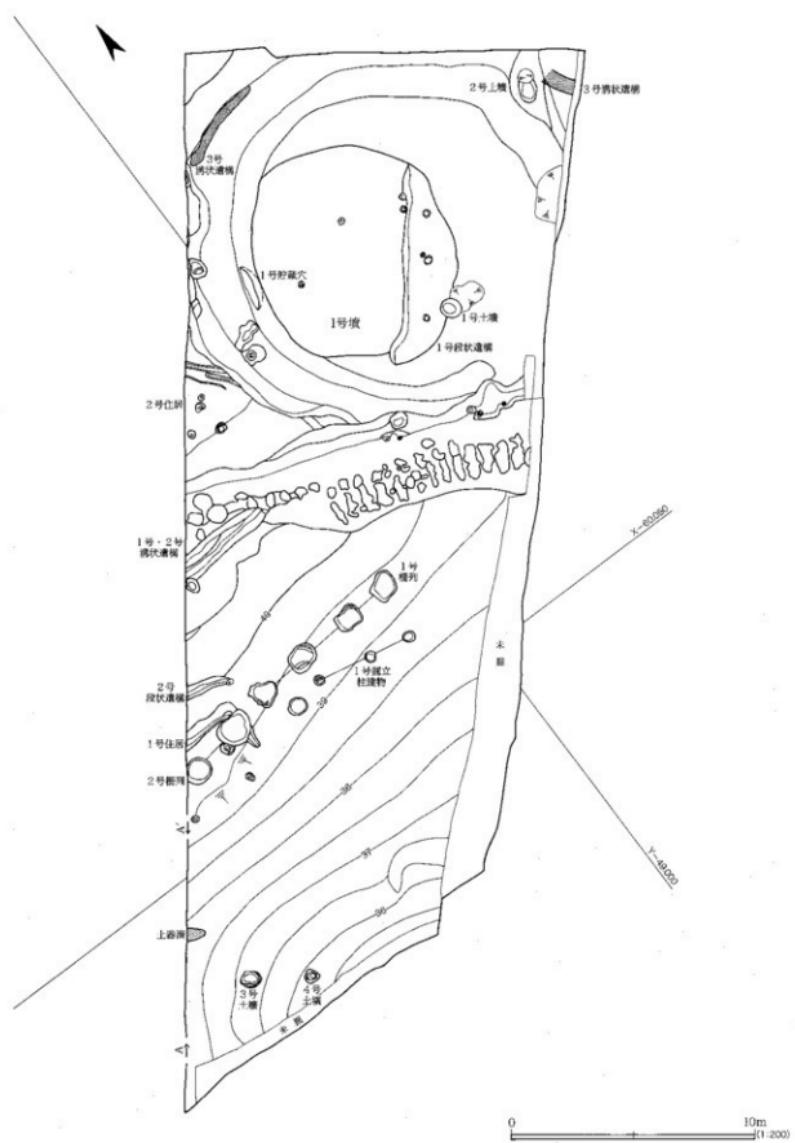


第1図 周辺の地形と遺跡分布図

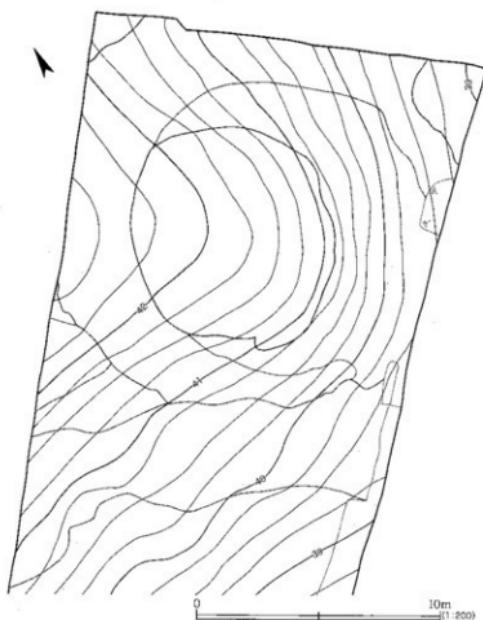
29 取木遺跡	37 大谷城跡	45 小林古墳群	53 屋喜山古墳群
30 一反半田遺跡	38 東狹間古墳	46 イザ原古墳群	54 屋喜山9号墳
31 コザンコウ遺跡A地区	39 猫山遺跡	47 中尾遺跡1次	55 夏谷遺跡
32 コザンコウ遺跡B地区	40 上神大将塚古墳	48 トドロケ遺跡	56 和田城跡
33 道祖神峰遺跡	41 柴栗古墳群	49 西前遺跡A地区	57 中峰古墳群
34 両長谷遺跡	42 三度舞墳丘墓	50 西前遺跡B地区	58 沢ベリ遺跡1次
35 古墳群	43 イザ原遺跡	51 米里銅鐸出土土地	59 沢ベリ遺跡2次
36 四王寺跡	44 大谷大将塚古墳	52 若林遺跡	60 平ル林遺跡



第2図 クズマ遺跡2次調査区位置図



第3図 クズマ遺跡2次遺構全体図



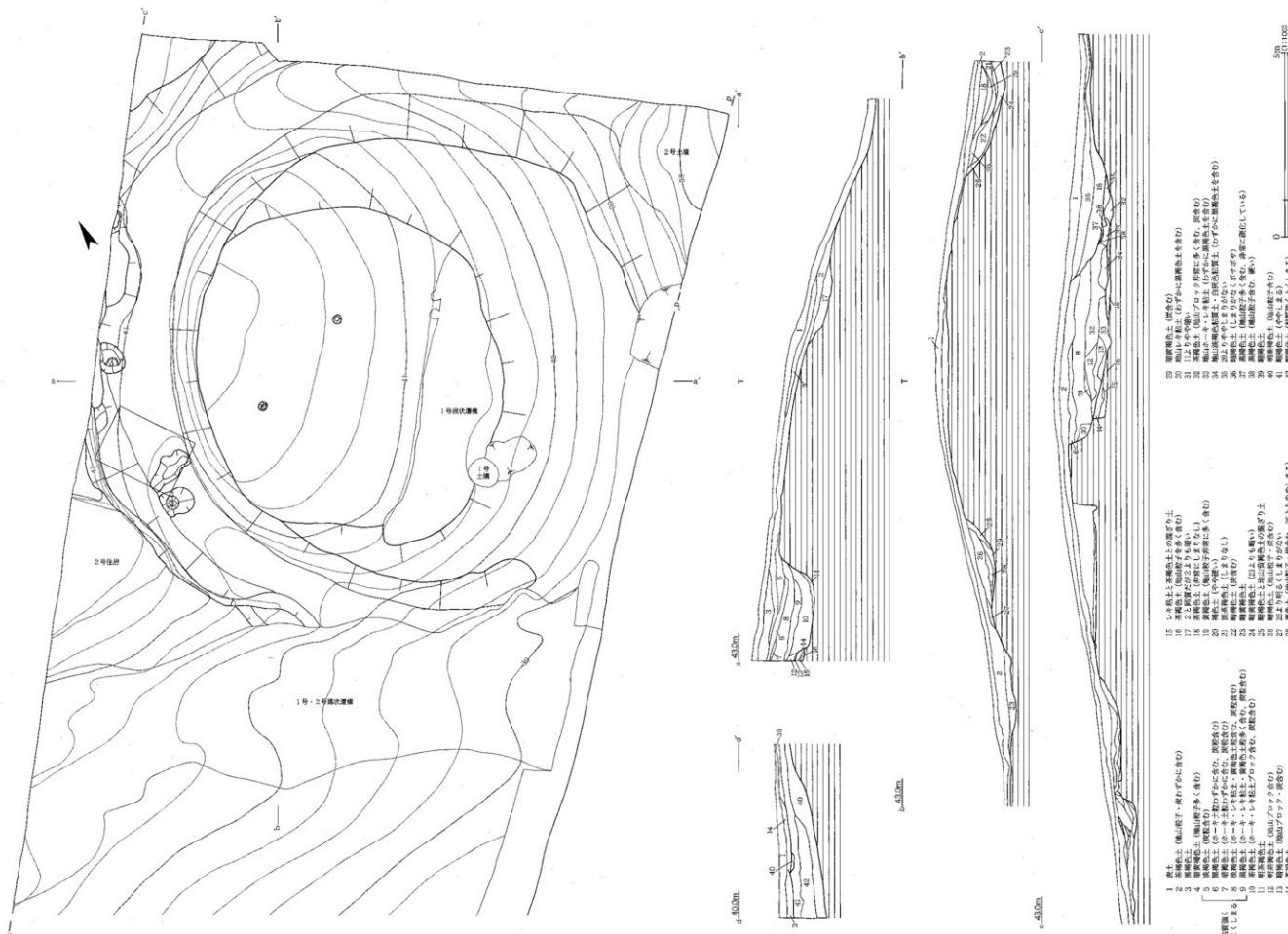
第4図 1号墳調査前地形測量図

1 遺構

1号墳 丘陵の尾根部分（標高42m）で検出した。南北の直径約14mの円墳である。西側・北側では、周溝が一部調査区外にかかる。他遺構との切り合いは、1号墳が西側にある2号住居・1号貯蔵穴、墳頂部東側にある1号段状遺構・1号土壙を切る。1号墳が東側にある2号土壙、南側の1号・2号溝状遺構、北側の3号溝状遺構に切られる。また、周溝西ベルトの土層断面（第5図a-a'）には、埋土中に1号墳の周溝の立ち上がりの線があり、調査区外に広がる何か別の遺構がある程度埋まつた後に1号墳の周溝が掘削されたと考えられる。調査区西壁の断面には調査区外の別遺構の埋土（土層断面図中の14・15・16層）が幅5.3mにわたって確認できた。現段階で確定はできないが、1号墳の周溝と同じような深さがあること、踏査によると同じ丘陵上には古墳が連なって分布することなどから、古墳である可能性が高いと考えられる。

壙丘 墳丘は後世の削平により遺物包含層の直下はⅢ層以下の地山となり、壙丘盛土・主体部とも遺存していないかった。

周溝 周溝はほぼ全周するが、標高の低い側にあたる東側では、後世の削平のためか検出できなかった。周溝は残りの良い西側で幅が3.3~3.6m、検出面からの深さは最大0.93mを測り、底面はⅧ層まで及ぶ。断面形は南側と北側はU字形だが標高の高い西側では逆台形に近い。底面は基本的にほぼ平らで、調査区の西壁際の段状に掘り残されたような部分は、調査区外西側に広がる遺構の底面であると考えられる。周溝の西側で土壙を3基基礎認したが、掘り方の形態が不整であること、土壙内の埋土が周溝内の埋土と同一であること、遺物が特別集中して



第5図 1号横断構図

出土したわけではないことなどから、埋葬施設とは考えにくい。

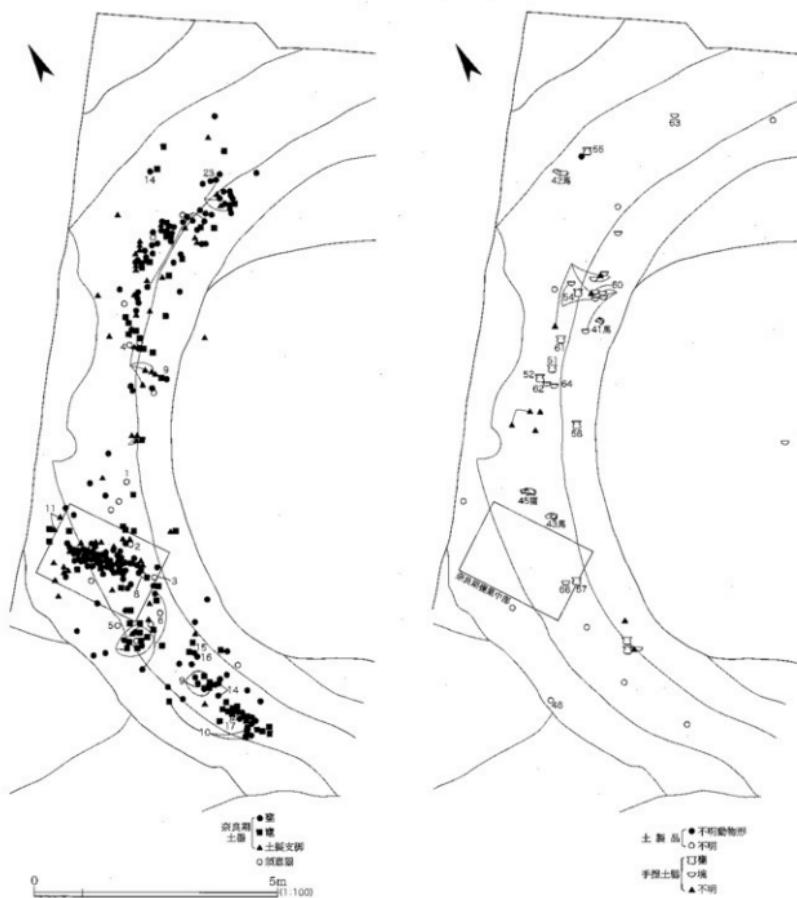
周溝内からは、土師器・須恵器の他円筒埴輪・瓶形土器・土製錘車・竈・土製支脚、さらには土製動物形・手捏土器・ミニチュア土器などのいわゆる祭祀遺物、白玉・滑石製模造品・鉄製品などの副葬品、鉄滓・炭化した種子など多種多量の遺物が出土した。遺物が多量に出土したのは主に図中1～8層で、9～12層からの出土遺物は上層に比べ少ない。また、8層以上の層位では下層の出土遺物と時期が異なるため、8層以上を周溝上層、それより下の層を周溝下層として呼ぶこととする。

周溝最下層には、30・32・33層など地山土の大きなブロックがみられ、周溝をある程度まで人為的に埋めた可能性も考えられるが、明らかにはできなかった。周溝下層からは土製錘車49、土師器小型丸底壺27～29・甕30・鉢31・高杯33・34・須恵器壺35・憩36、鐵鎌F1、砥石S9などが出土しているが、供獻状態といえる出土状況のものはなかった。また、円筒埴輪についてはそのほとんどの破片が周溝上層出土で、基底部の破片が数片しか存在しない点から、直接1号墳に伴わない可能性がある。

周溝上層からは土師器煮沸用具である「く」の字口縁で体部が半球形をなす土師器甕（第15図13～26。以後奈良期甕と仮称）・竈・土製支脚の出土がみられた。これらと土製模造品の分布状況を図化したもののが第6図である。このうち周溝西側では奈良期甕・土製支脚が集中して出土している（奈良期甕集中部として後述する）。周溝南西側では土製支脚がほとんど出土せず、奈良期甕・竈が集中するが、奈良期甕集中部のような面的集中ではなく、出土層位もややばらつく。竈については他遺跡例と同様に完形に復元できるものは無く、何個体分かを復元するのも困難な状況であった。手捏土器は周溝の北西側で主に出土している。土製動物形の出土位置は特にまとまりをもたない。また、出土した須恵器では後期古墳に一般にみられる蓋壺・甕が少なく、高壺の個体数が多いのが目立つ。これらも完形近くまで復元できるものは少なかった。

奈良期甕集中部 周溝検出面から0.2m、周溝底面からは0.7m上で、1.8×0.5mの範囲で北西—南東には一直線に奈良期甕・土製支脚がならぶように出土した。各破片は互いに接するように出土し、短期間に内に置かれているような出土状況である。出土遺物は周溝底面の断面形と同じく北西が高く、南東が低い。集中部の底面でのレベル差は0.5mある。出土した層位は、集中部から下層では奈良期甕・土製支脚などが出土しないため、周溝上層と周溝下層の境目であると考えられる。出土遺物は北西側（高い側）のものが完形度が高い。遺物群の底には直径約25cmほどの平坦な石があり、破片の中にはその石に接した状態で出土しているものもあるが、その破片はより上方の破片と接合している。奈良期甕とセットとして使用される器種であるといわれる土製支脚も、北西の高い側で完形度の高い個体が出土していることなどからも、遺物が主に置かれるのは北西側の部分であると考えられ、底部にある石はその上に遺物をのせるためではなく、何か別の目的があって設置した可能性がある。北西側の遺物出土状況を詳細に観察すると、奈良期甕よりも先に土製支脚が置かれたことが分かる。また、完形近くまで復元できるとはいながら、奈良期甕のなかで最も上で出土した17以外の遺物はその周辺が埋沈する前にすでに壊れていたような状態での出土であり、17のみが伏せた状態での出土であることと合わせて、ただ廃棄したというだけではなく、何か意味があると考えるべきかも知れない。集中部には最低でも奈良期甕が7個体、土製支脚が3個体認められる。奈良期甕集中部の周辺では、これを囲むような施設は検出できなかった。

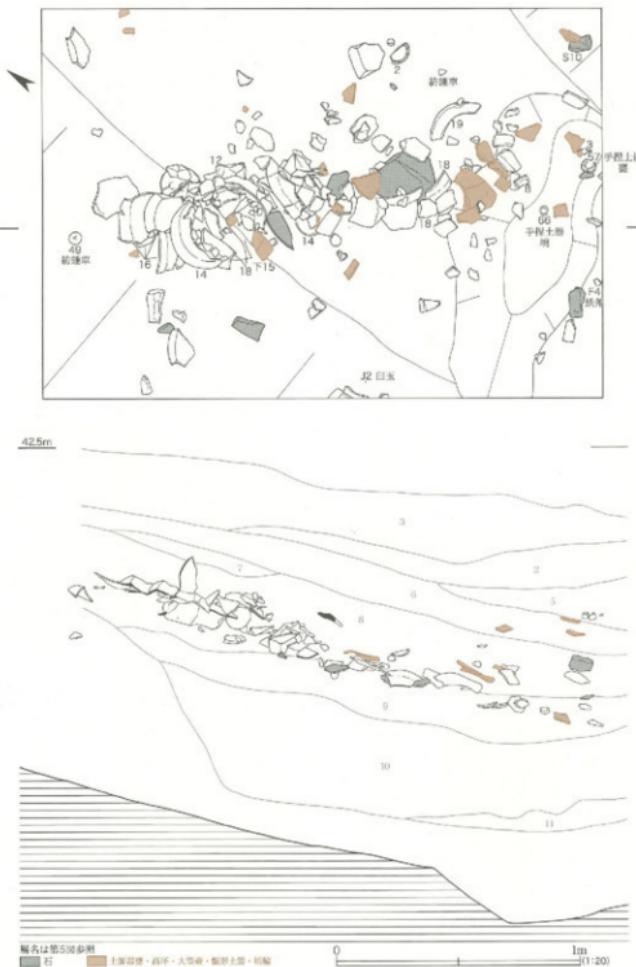
1号住居 丘陵の斜面部分（標高39.5m）に位置する。調査区内で確認したのは北辺と東辺の一部である。2号段状構造を切り、2号柵列に切られる。流出もしくは後世の削平のため斜面側は失われているが、長方形の住居であると推定される。検出面からの深さは最大で0.54m。埋土は基本的に黒褐色土で炭粒を含み、下層には焼土を含む。床面には柱穴間を結んだライン内に1ヶ所、P2の外側に1ヶ所焼土面が認められた。柱穴はP1・P2・P3で、掘り方は円形である。住居床面から検出できたP2では、掘り方は床面で直径約0.5m、深さは最



第6図 奈良期窯・竈・土製支脚・土製模造品分布状況図

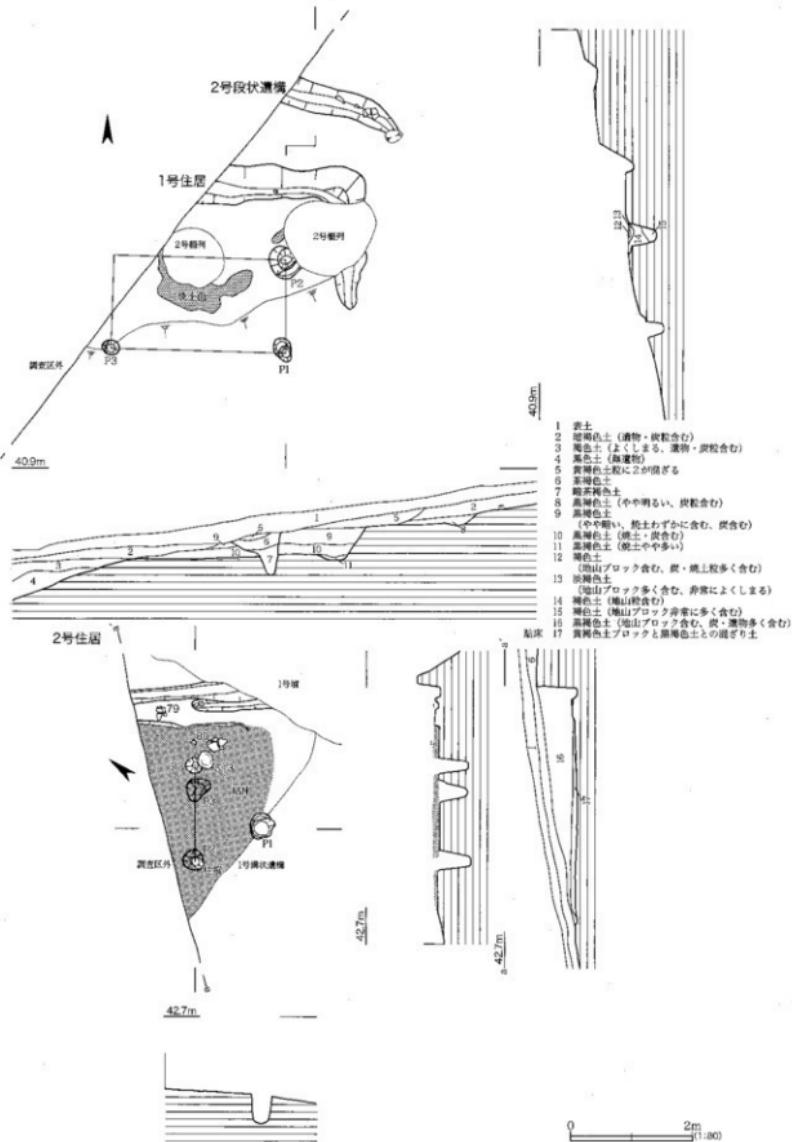
大0.46mである。各柱穴の埋土には柱痕跡はなかった。各柱穴間距離は心々でP 1-P 2が1.32m、P 1-P 3が2.84mである。床面直上からの遺物はほとんどなく周壁溝の底面から土製支脚の小片が出土しているだけであった。埋土中からは土師器甕などが出土しているが、いずれも小片である。

2号住居 丘陵の尾根部分（標高約42m）に位置する。1号塼及び1号溝状構に切られる。一部の検出に止まつたが、確認することのできた北東辺が直線的である点や、ピットの並び方などから方形の住居と推定される。検出面からの深さは最大で0.56m。埋土は黒褐色土の単純層で地山ブロックを含み、また炭・遺物とも多量に含んでいる。床面には黄褐色土ブロックと黒褐色土との混ざり土で貼床が施されているのを確認した。貼床土は約

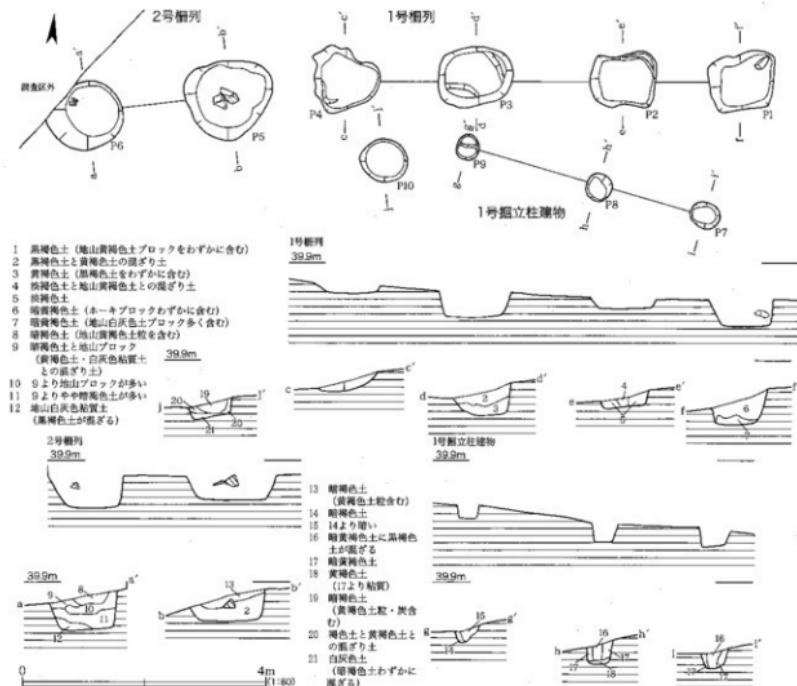


第7図 奈良期壇集中部平・断面図

5cmの厚さがある。貼床土を掘り下げた後、新たにピットと周壁溝を確認したため、建替が行われていることが分かった。柱穴は、建替前はP 2・P 3'、建替後はP 2は同位置のままP 3に拡大させている。西側が調査区外に広がるため、主柱穴は2本だけではない可能性がある。柱穴間距離はP 2-P 3'で1.16m、P 2-P 3で1.58mである。P 3'が建替のためか不整形になるもののP 2・P 3の掘り方は円形である。P 2では長径23cm短径16cmの貼床土で埋められていない部分を確認した。P 1は、住居南東辺の周壁溝が他遺構との切り合いのた



第8図 1号・2号住居、2号段状遺構遺構図



第9図 1号掘立柱建物、1号・2号棚列遺構図

めか確認できなかつたが、柱穴との位置関係から壁際特殊ビットと考えられる。周壁溝も貼床土と同質の土で埋められている古段階の周壁溝から新段階の周壁溝へ心々で0.24m拡大している。貼床の床面上から、作業台と考えられる扁平な石S13と共に、土師器高杯79・瓶形土器80が出土している。

1号掘立柱建物 調査区中央の斜面部分（標高39.5m）に位置する。ビット列は片側しか確認できなかつたが、断面観察で柱（抜き取り）痕跡が確認されたこと、柱穴の規模・配列などから掘立柱建物と考えられる。柱列はP7-P9まで2間分確認した。地形から考えて、桁行2間×梁行1間の建物と推測される。桁行の全長は心々で4.05m、各柱穴間の距離はP7-P8で1.92m、P8-P9では2.13mでやや不揃いである。柱据り方はいずれも不整な円形で直径45cm前後である。軸線上での検出面からの深さはP7・P8で約0.3m、P9は約0.2mである。遺物はP7から土師器甕81が、他のビットからも土師器小片が出土した。

柵列 調査区中央の斜面部分（標高39.5m）に位置し、1号・2号溝状遺構から約2~3.5m離れている。ビットの配列から2列存在すると考えられる。方向は等高線にほぼ平行である。

1号棚列 ビットを4基（P1~P4）、3間分確認した。長さは心々で6.48mである。各柱穴間の距離はP1-P2で1.92m、P2-P3で2.40m、P3-P4で2.16mと不揃いである。P4のみ不整な形をしているが、他は隅丸長方形を基本とした形で、いずれも長軸1.1m前後、短軸1m前後である。検出面からの深さはP1・P

3は0.44m、P 2・P 4は0.18mである。埋土はそれぞれ違うがP 2では柱抜き取り痕跡と考えられる土層を確認している。P 2の埋土からは須恵器長頸壺B2が出土した。

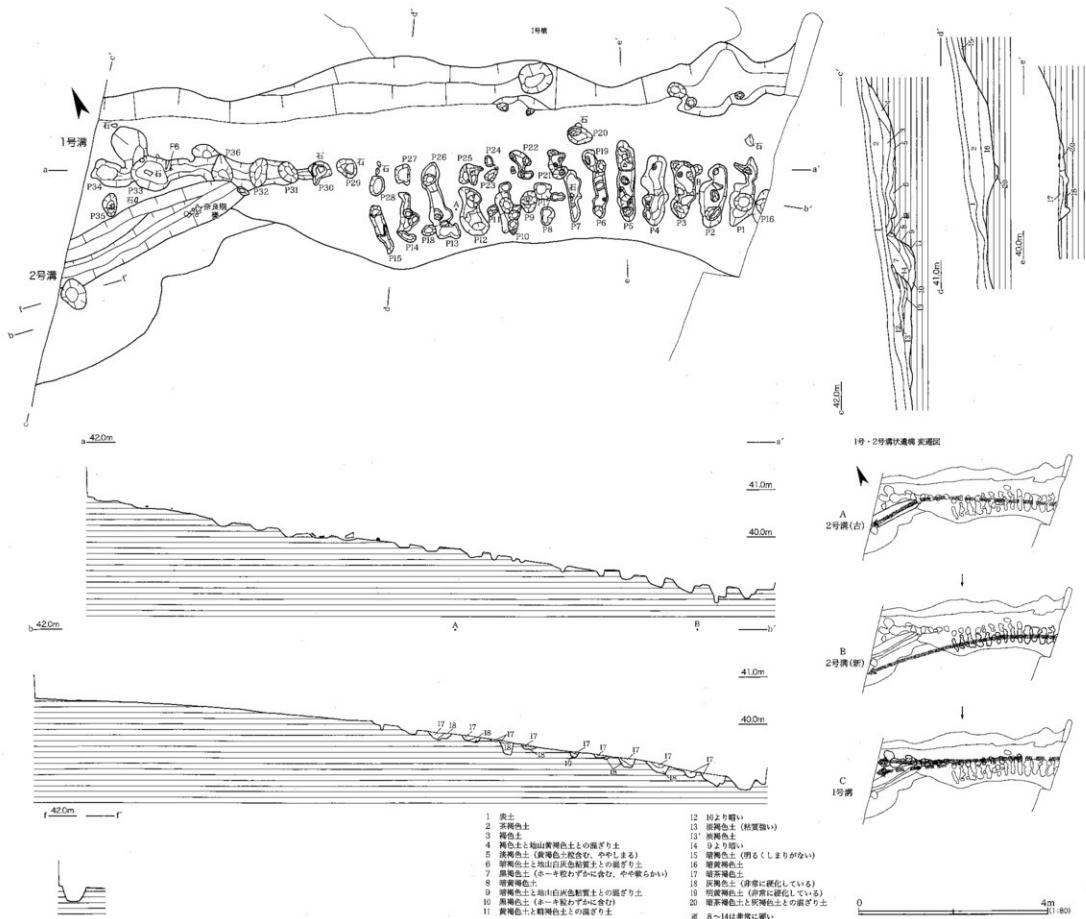
2号柵列 ピット2基（P 5・P 6）の1間分確認した。1号住居が埋まつた後に造られる。柱穴間距離は心々で2.38mである。掘り方はP 5で直径約1.3m、P 6で直径約1mの円形で、深さは最大でP 5では0.52m、P 6では0.65m、底面はほぼ平らである。両方とも柱抜き取り痕跡は確認できなかった。埋土上層からP 5では石とともに壺B3が、P 6では土製支脚B4が出土している。

1号・2号溝状遺構丘陵尾根筋からやや下った位置（標高39～41m）にある。1号墳の南側周溝をやや削る。東西はさらに調査区外に延び、調査区内では長さ14.5m分を検出した。検出した幅は第10回断面d-d'の位置では4.5mである。検出面（北側肩）からの深さはP 32のあたりで0.3mである。底面の断面形はやや凹んだようになり、底面には楕円形の土壠が心々で0.6～0.7mの間隔で連なる。底面は西に行くほど高く、平均斜度は断面a-a'で8°、b-b'では土壠列が存在する部分で8°、土壠列より西では4°で、両方共に今回の調査地のある丘陵を徐々に上っていくような傾斜である。検出面の土層はVI'黄褐色土で、底面は西半分はVII白灰色粘質土まで掘り込むが東半分はVI'黄褐色土層中に収まっている。

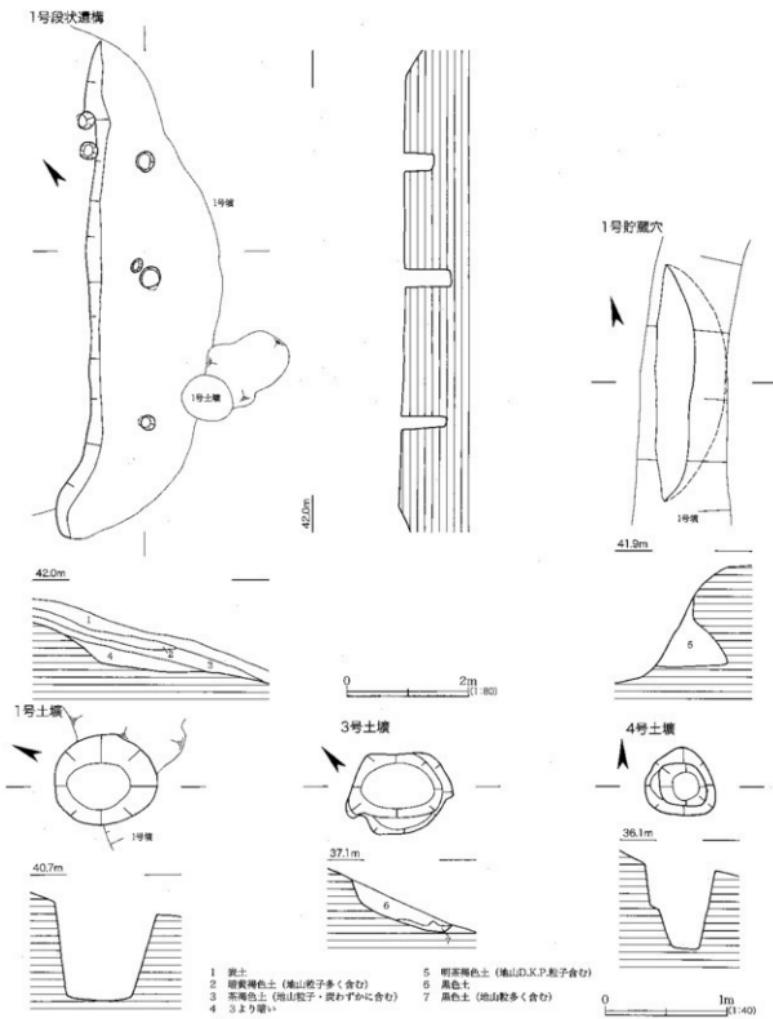
西側4分の1では底面が2条に分かれ、調査区西壁の断面観察によると斜面上方の溝（1号溝状遺構）のほうが斜面下方の溝（2号溝状遺構）より新しく、さらに2号溝は大きく2時期に分けられることが分かった。断面図c-c'の図中では3～6の層が1号溝、7～11は2号溝（古）、12～14が2号溝（新）の埋土である。2号溝の埋土のうち8～14までは非常に硬化していたが、1号溝の埋土は2号溝のように硬化した土層は認められなかった。2号溝埋土である硬化土は1号溝との重複のためか断面d-d'では確認できず、また、2号溝（古）の底面も調査区西端からP 32のあたりまでしか確認できない。底面の土壠は長径1～1.4mのもの（P 1～P 7・P 10～P 15）と長径0.6m前後のもの（P 19以降）との2種類があり、両者の切り合いを観察できたP 5では後者のほうが新しいことが分かった。

土壠列の方向性と上記の点から溝状遺構の変遷は図中A～Cのように考えることができる。2号溝（新）に伴うと考えられる大型の土壠の配列は、わずかに南へ曲がりながら斜面を上るようにならぶが、P 7とP 10との間に不連続が認められる。同様にP 27・28とP 29の間にもやや不連続があるため、土壠数個程度が掘削の単位である可能性が考えられる。底面の土壠は掘り方の形態・底面ともに不整形だが、埋土は1号溝に伴うと考えられる小型のものは基本的に1層、2号溝の大型のものは上下2層の比較的単純なものであった。小型土壠の埋土（図中21）・大型土壠の埋土の内下層（18・19）はやや硬くしまり、上層（17）は軟質である。すべてではないが、土壠埋土上層と下層の境に3cm程度の土器小片・石がやや面的にまとまりをもって出土したものもあった。また、2号溝検出面（7・12層上面）でも壺・土製支脚などの小片が小型の土壠の大きさと同じ様な範囲でまとまって出土している部分があった。土壠内からは土師器・須恵器・壺など多種の土器片や平瓦95・鉄滓さらには滑石製白玉J 3などが出土した。また、溝底面（土壠検出面）では土器片・石・不明鉄製品F 6が出土している。

3号溝状遺構丘陵尾根筋、1号墳の北側周溝内で確認した。周溝の掘り下げ中に硬化面（第3図全体図アミ部分）を検出し、その後各断面での確認になったため、細部の形状等は未確認である。調査区の西壁と東壁で3号溝底面の硬化土層（北壁は第5回c-c'の37・38層。南壁はd-d'の40層）を確認しているため調査区を越えて東西に延びると思われる。調査区北壁の土層断面では、1号墳周溝がほぼ完全に埋まつてから掘り込まれている。底までの埋土上層は軟質である。底面の硬化土（面）は連続して確認できなかったが、1号墳周溝の北側部分の埋土も3号溝上層の埋土と同質で、周溝西側のような遺物の多量の出土がみられなかった点、2号土壠の断面でも硬化土（第12図の1層）が確認できた点などを考えると、1号墳の北側に沿つた形で延びていたことが



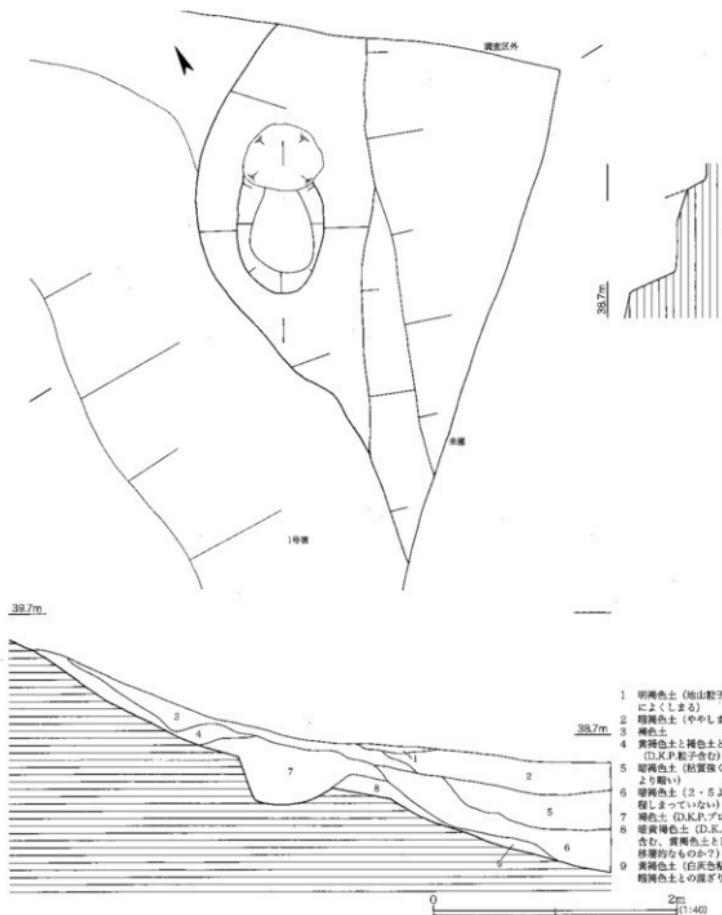
第10図 1号・2号溝状透構造図



第11図 1号段状遺構、1号貯藏穴、1号・3号・4号土壙遺構構図

想像される。時期を示す明瞭な遺物は出土していないが、各遺構が完全に埋まつた以降の築造であり、埋土もかなり歓らかくしまりがないことなどから比較的新しい可能性が高い。

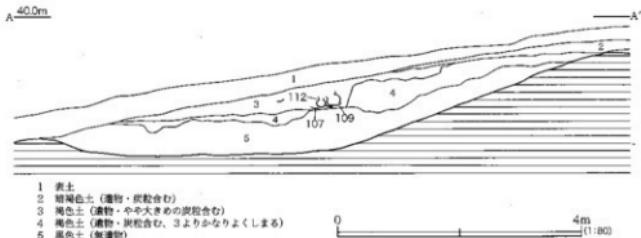
1号段状遺構 丘陵尾根部分（標高41m）、1号墳の東側頂部で検出した。1号墳に切られ、東側は遺存しない。平坦面は最大で長さ8.2m、幅1.9mで、深さは検出面から0.25mである。埋土は茶褐色土の単純層で、土師器小型丸底壺6・壺97・壺98・99・高壺100などの遺物を比較的多量に含む。底面はほぼ平らで直径0.25～0.30mの



第12図 2号土壤遺構図

ピットが3基ならぶ。ピットは深さ0.50~0.74mと不揃いである。1号墳に削られる東側斜面でも、同程度の間隔・深さであれば検出可能だが、ピットは確認できなかった。底面からの遺物はなかった。

2号段状遺構 丘陵斜面部分（標高40m）に位置する。調査区内では1号住居と重複するため、全容は不明であるが、斜面をカットし水平部分を造り出しており、また、1号住居とは時期が違う遺構である可能性があるので段状遺構とした。平坦面の長さは2.6m、幅は1m確認した。肩から平坦面までは0.15mの深さがある。段の際は幅0.5m、平坦面からの深さ3cm程度の浅い溝状になる。埋土からは土師器壺・高杯・小型丸底壺などの小片が出土している。溝部分の底部からは瓶形土器が出土した。



第13図 土器窯断面図

1号貯蔵穴 丘陵尾根部分、1号墳の西側で検出した。1号墳の周溝に切られて、わずかに遺存する。貯蔵穴直上部分の地山面から底面までの深さは0.8mである。断面の形態は三角フラスコ状になると推定される。底面は確認した範囲では幅1.94m・奥行き0.58mを測り、遺存している部分から直径2.4m程度に復元される。埋土中からは弥生土器壺101・102が出土した。また、貯蔵穴周辺の1号墳周溝最下層より、弥生土器高环103・104が出土している。

1号土壤 丘陵尾根部分、1号段状遺構の中に位置する。掘り方は $0.84 \times 0.74\text{m}$ の楕円状である。深さは0.9mで、底面はほぼ水平である。埋土は褐色土系の単純層であった。遺物は主に埋土上層に多く、土師器壺105・106・高环・小型丸底壺が出土している。

2号土壤 調査区北東隅の丘陵尾根部分に位置する。1号墳の周溝を削る形で北東側に急に低くなっている部分に造られている。長軸は0.84m残存し、短軸は0.72mで、深さは最大で0.4mである。断面観察によると、2号土壤上に幅2.12m、土壤肩からの高さ約0.2mの盛り土状の層（第12図断面図7層）が認められた。調査区外の法面の観察から1号墳の東側にも古墳が存在する可能性があり、2号土壤はその古墳の周溝内埋葬施設の可能性が考えられる。大山遺跡C地区などで周溝内埋葬施設にも墳丘が造られる例が知られているが、2号土壤上に確認した7層は盛り土と考えられるような硬さがなく、その範囲も明確にはしがたいこと、供獻状態と考えられる遺物も存在しないことなどから現段階ではその判断は保留したい。土壤内からは土師器小片が出土した。

3号土壤 調査区南側の斜面部（標高37m）に位置する。基本的層序のところで述べたII'層下の黒色土上面では検出できず、確認できたのは黒色土下のV層上面であるが、埋土が黒色土であるため本来の検出面は黒色土上面であると考えられる。長軸0.88m、短軸0.66m、土壤肩から鉛直方向に最大0.21mの深さがある。埋土から遺物は出土しなかった。

4号土壤 3号土壤から南東に1.74m離れた所（標高36m）に位置する。確認したのは黒色土下のV層上面だが、3号土壤と同じく埋土は黒色土のため本来の検出面は黒色土上面と考えられる。長軸は0.59m、短軸は0.57m、土壤肩からの深さは最大0.76mである。埋土から遺物は出土しなかった。

土器窯 調査区南側の調査区際（標高38.5m）、1号住居から約4.5m南東に位置する。斜面部の包含層を掘り下げ中に土師器壺が集中して出土したため周辺を平面的に精査したが、掘り方にあたるものは検出できなかった。調査区際にはサブトレンチを設定し土層を確認したところII層（第13図断面図2層）の下、II'層（断面図中4層）の上面からテラス状に落ち込む層（断面図中3層）の底面には正位のまま土師器壺が置かれているような状態であることが確認できた。再度平面的に精査したが、掘り方のプラン・床面共に確認できず、土器の集中範囲を確認するに止まった。集中範囲は $1 \times 0.8\text{m}$ の範囲で、調査区外には広がらない様子である。土器を含む落ち込み（3層）の断面形態は2段掘りのようになるが、1段目の肩、底面の境界は漸移的であった。2段目の深さは

0.38mである。集中して出土した遺物は土師器壺が6個体107～110、小型の壺が2個体111・112で、ほぼ完形のまま出土した。竪穴式住居・段状遺構などの遺構である可能性も十分考えられるが、落ち込みに伴うピットなどが検出できなかつたため、今回は土器窓として報告した。

註 真田廣幸他 『立縫遺跡群IV 大山遺跡発掘調査報告書（C・D地区）』 倉吉市教育委員会 1989

2 遺物

今回の調査では弥生土器・土師器・須恵器・土製品・鉄製品・玉類・石製品などコンテナ約50箱分の遺物が出土した。ここでは土製品・鉄製品（第22図）などについて述べ、その他は観察表に一括した。

遺跡全体で出土した土製品の種類と数は、土製馬形4、土製猪形1、土製動物形1、土製紡錘車6、土玉1、手握土器48（壺13、塊21、器形不明14）、その他器種不明の土製品30の合計91である。

土製馬形（41～44） 具象的な外形だが目鼻口の表現がない頭部片41、同じく口しかない頭部から胸部の42と、抽象的に目鼻口とてがみを表現した頭部片43・44がある。

土製猪形（45） 具象的な外形で耳と尾を表現し、左側二肢が欠けている。

土玉（50） 直径2.4cmで上下から穿孔をするが貫通していない。

土製紡錘車（47～49） 6個体出土した。断面形態が板状のもの1点（47）、三角形のもの1点、高い台形のもの1点（48）、コマ形のもの2点（49）、他1点の4タイプある。いずれも調整はナデによる。コマ形の49は上下から穿孔する。

不明土製品（46・75・76） 46は鳥または魚とも推定される均一の厚さを持つ板状ものである。片面に沈線を施し、翼と尾？あるいはヒレ？を表現する。裏面はナデる。76は円形になるとみられるもので、須恵器坏蓋のかえり状の突起があり、その内側はケズる。その反対側はナデる。75は、器台状で焼成前に穿孔を施す。

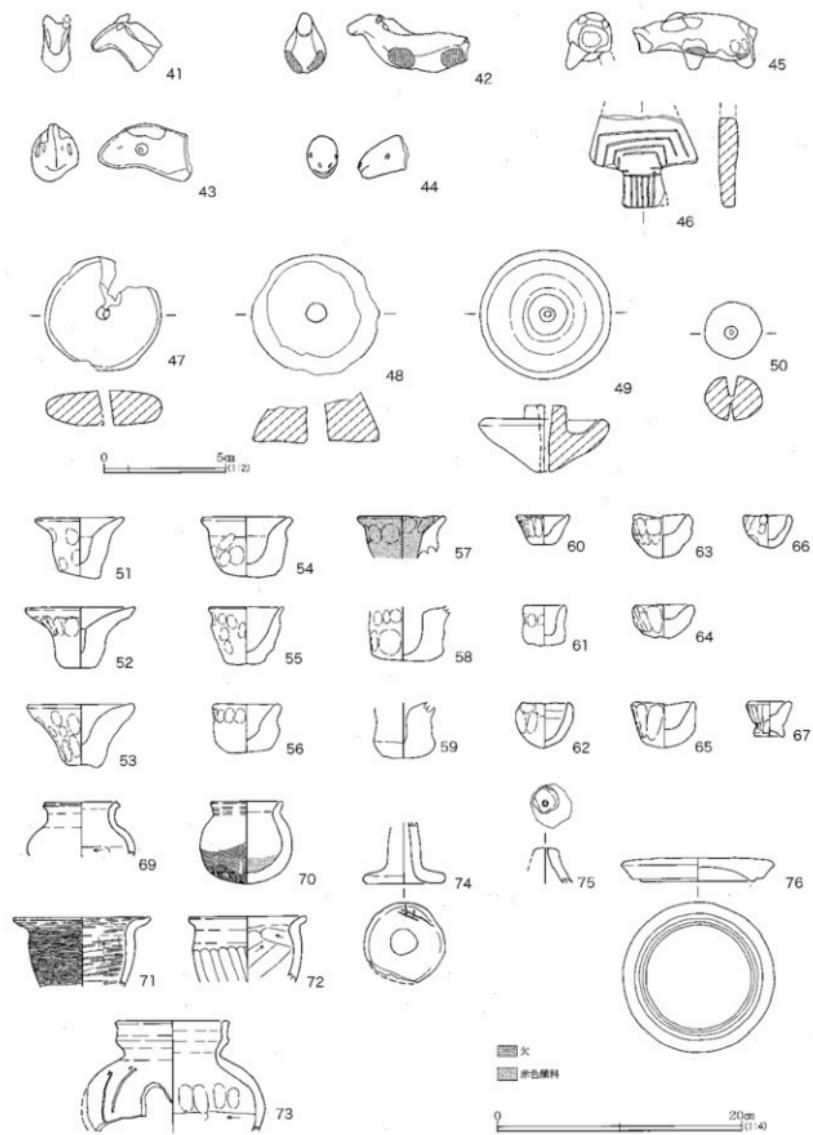
手握土器 形態により、口縁部が外方に屈曲しているものを甕、口縁部が屈曲せず体部外反のものを塊として取り扱った。

甕（51～59） 底部の欠損した57を除き平底で、大きく口縁部が外反する51～53とそうでないものとある。調整は指オサエとナデによる。

塊（60～68） 口縁部が直線的に外反する60、ほぼ直立し底部に粗いハケメのある61、内湾気味のその他のものがある。調整は、外面指オサエ内面ナデを基本とする。粘土の輪積み痕跡が口縁部に遺存する62、板痕跡のある60・63がある。67・68は底部を高台状に作り出す。

鉄製品（F1～F5） F1は鉄鎌の茎片、木質が一部遺存。残存長3.2cm、残存幅0.5cm、残存厚0.3cm。F2は長頸鎌とみられる破片で平面形は片刃箭形、断面形は平刃。逆刺は無し。刃の先端は曲げられている。残存長8.3cm、残存幅1.1cm。F3は盤状鉄製品、残存長13.6cm、幅0.6cm。F4は有袋鉄斧（無肩）の袋部分。残存長4.5cm、残存幅2.8cm、残存厚0.8cm。F5は完形で種別不明。長さ2.7cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm、重さ9.1g。

鉄滓について 今回の調査で合計35点、1,282gの鉄滓が出土している。出土地でみると1号・2号溝状遺構埋土中が14点・536g、1号墳周溝上層で9点・234gである。表土・包含層出土のものも1号・2号溝状遺構周辺のものが多い。鉄滓が後期古墳の副葬品・供獻遺物として出土している例が岡山県など西日本各地で知られている。1号墳は埴丘上部が削平され、細かくは言及できないが、出土地がいずれも7世紀後半以降の層位の出土で、周溝下層の出土が全くない点を重視するなら、古墳に供獻された遺物ではなく、フイゴの羽口・坩埚などは出土していないものの、今回の調査地の近隣に製鉄もしくは鍛冶遺構の存在を示唆するものかもしれない。



第14図 祭祀遺物

勾玉模造品（J 1） 滑石製の模造品で一部欠損。残存長3.9cm、最大幅2.1cm、最大厚0.5cm、両面穿孔で板状である。

白玉（J 2・J 3） 2個体出土した。肉眼観察では表面が緑色で、どちらも滑石とみられ、側面に縦方向の擦痕が遺存する。J 2は長さ3.4mm・直径5.7mm・孔径1.8~2.0mm、J 3は長さ3.1mm・直径5.7mm・孔径1.8~2.0mmである。

註 大澤正己 「古提供物鉄津からみた製鉄の開始時期」『季刊考古学第8号』 雄山閣出版 1984

祭祀遺物

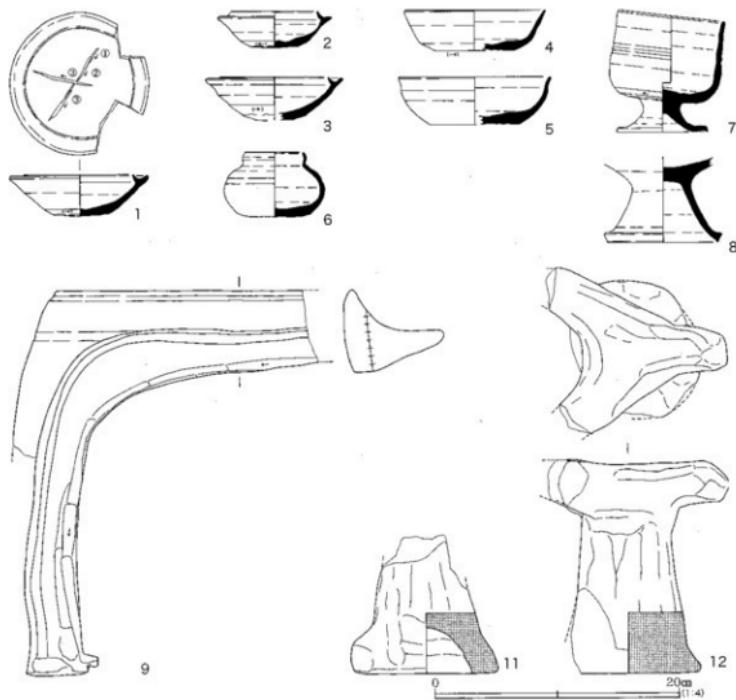
(注記()は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土 焼成 色調 保存度
1号墳周溝下層	69	ミニチュア 土器 壺	口徑 (5.5) 最大胴径 (8.5)	口縁部は外反し、壺部はやや張り、壺面は凹面をなす。	口縁部内外面ヨコナギ。体部外縁はナギ 調整、内面最大胴径以上はナギ、下 半は横方向のヘラケズリ。	胎土密。2mm以下の砂粒わずかに含む。 黒褐色粘子も含む。焼成良好。淡黄褐色。 口縁部～壺身上半/5段分。
	70		口径 (5.5) 最大胴径 7.5 高さ 6.7	口縁部は幅く外反する。壺部外縁には2 重の伏線がありぐる。体部は筒形で、器壁 が厚い。	口縁部から体部上半はナギ。体部下半は 外縁ハナメ調整、内面はヘラケズリ後ナ ギ。	胎土密。1~5mmの大砂粒含む。焼成良 好。淡黄褐色。底面内面に赤色顔料残る。 口縁部2/3欠損。
調査区S区	71	ミニチュア 土器 壺	口径 (11.0) 最大胴径 (8.7)	口縁部は横方向に聞く。壺部は丸い。	口縁部内外面ヘミガキ後ヨコナギ。体 部外表面に丁寧なヘミガキ。内面側 方向のヘラケズリ後ヘミガキ。	胎土密。1~2mmの大砂粒含む。焼成良 好。内面青色、外面黒褐色。口縁部～ 体部1/5段分。
1号墳周溝上層	72		口径 (6.2) 最大胴径 (8.9)	口縁部は幅く外へ聞く。壺部は丸い。	口縁部内外面ヨコナギ。体部内面は継方 角のナギ、外面は斜め横方向のヘラケズリ。 底面ナギ。内面は斜め横方向のヘラケズリ。	胎土密。1~2mmの大砂粒比較的多量に 含む。焼成普通。暗褐色。口縁部～体部1/4 遺存。
調査区S区	73	土器壺 壺	口径 (8.8) 最大胴径 (15.0)	小型。口縁部は追化した二重口縁で、器 面積は薄い。体部最大胴径位に、焼成後 の穿孔とみられる欠損部分がある。外縁 上半に、点と線を単位とする2本の 縦割りがある。	口縁部内外面ヨコナギ。体部内面、底部 から最大胴径位まではナギで、指圧窪 残る。最大胴径位以下は横方向のヘラケ ズリ。	胎土密。1~4mmの大砂粒含む。焼成良 好。淡褐色。口縁部～体部1/4遺存。
1号墳次溝鶴 埋土上層	74	ミニチュア 土器 壺	口径 (5.0)	高弧の脚跡。壺部は横方向に張り出し、壺 部は丸い。底面には、ヘラ切目が認めら れる。	柱状部内面は鋭面平滑。その他のナギ。	胎土質。1mmの大砂粒わずかに含む。 黒褐色粘子も含む。焼成普通。淡黄褐色。 底面のみ遺存。底部1/4欠損。

1号墳

(注記()は推定値)

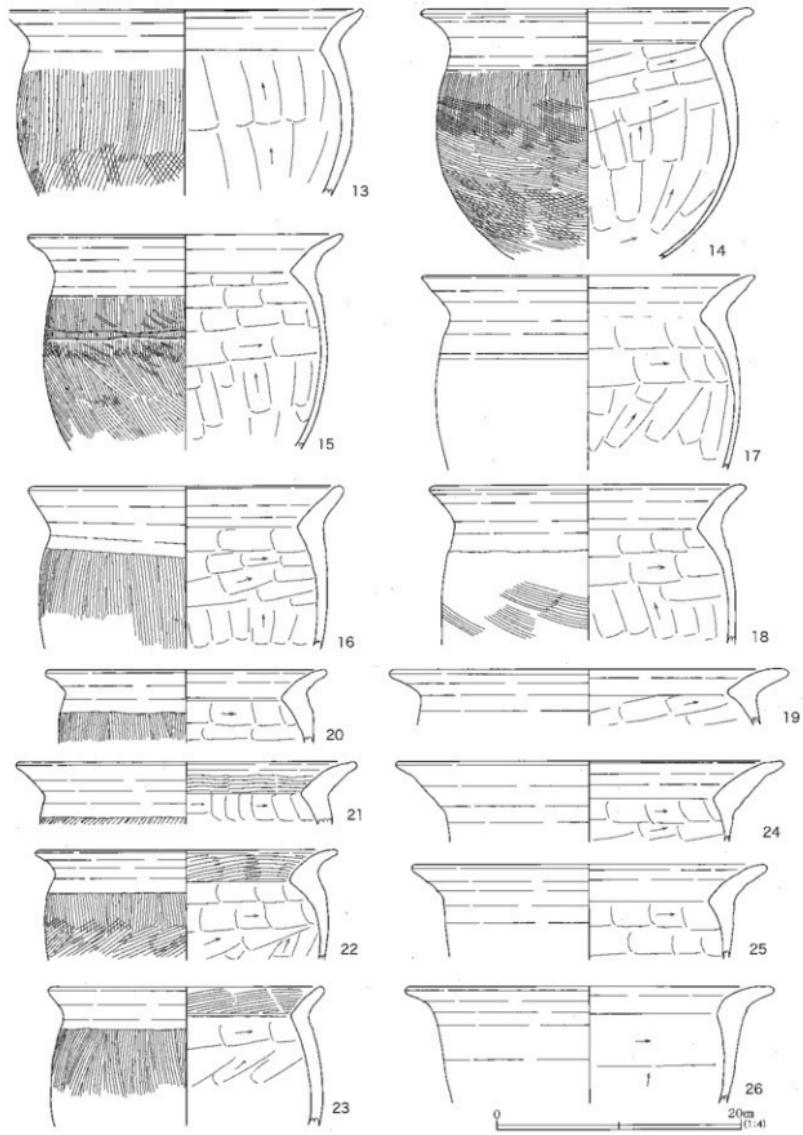
出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土 焼成 色調 保存度
周溝上層	1	須恵器 壺	口径 9.1 高さ 3.4	小型化し、短いたちあがりを有する等。 2は受部が横方向に開いたちあがりにや や高さがある。1・3はたちあがりが矮 小で、受部は外上方へのびる。1の内面 に焼くやや堅広のヘラ切目有り。	口縁部はいずれもヨコナギ。内面は仕 上げナギ。底部外縁は1・3は時計回り、 2は反時計回りのヘラ切り。後1・2はナ ギで仕上げる。3は未施業。	胎土密。1~2mmの大砂粒ごくわずかに 含む。黒褐色粘子わずかに含む。焼成良好。 外面に黒色の自然釉がかかる。灰褐色。 口縁部1/4欠損。
(焼成期 集中部)	2		口径 (7.7) 高さ 3.0			胎土密。1mmの大砂粒含む。黒 色粘土質比較的多量に含む。焼成良好。 外面灰がかかる。底面外縁に 2.5cm×1.3cmの大砂粒の剥離の痕跡が 潜伏。1/2欠損。
	3		口径 (8.9) 高さ 3.5			胎土密。1~2mmの大砂粒比較的多量に 含む。焼成良好。内面黒褐色。外面黑 灰。2/3欠損。
	4		口径 (11.4) 底径 (8.5) 高さ 3.3	底部は平底で、口縁部は外上方へ張り 出る。	口縁部は内外面ヨコナギ。底部内面は回 転を利用したナギ。底部外縁は時計回り のヘラ切り後未施業で、枯土色を残した まま。	胎土密。1mm以下の砂粒わずかに含む。 黒色粘土質ごくわずかに含む。焼成良好。 外面一部光沢をもつ。灰褐色。口縁部1/3, 底部1/2欠損。
5			口径 (12.2) 底径 (7.7) 高さ (3.9)	底部は平底で、鋸縫は内面しながら聞き、 口縁部は外反する。	口縁部・体部は内外面ヨコナギ。底部内 面は仕上げナギ。外縁はヘラ切り後未施 業。	胎土密。2mm以下の砂粒比較的多量に含 む。黒色粘土質比較的多量に含む。焼成良 好。外面灰をもつ。灰褐色。口縁部4/5, 底部1/2欠損。



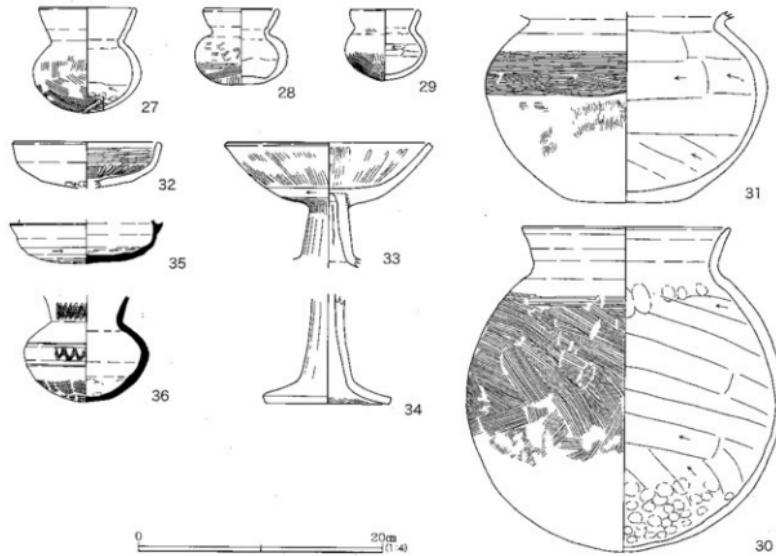
第15図 1号墳周溝上層出土遺物 1

出 土 位 置	№	器 形	注 量 (cm)	形 態	手 法	地 士 鍋 色 滲 況
周溝上層	6	須恵器 小型短頸壺	口径 (4.6) 最大胴径 (5.2) 底高 5.3	底部は平坦。体部は瓶の形なり、肩部からやや下がった位置に洗盤がめぐる。口縁部は内側する。	口縁部から体部上半まで内外面ヨコナギ。体部外腹沈線を施した後ナギ。底部外腹はへたり後ナギだが調整が難解で、極端にい。底部内面は目板を利用したナギ。	粘土質、後成良好。淡褐色。口縁部～体部1/2欠損。
	7	須恵器 脚付壺	口径 (5.6) 脚径 (7.3) 底高 (10.0)	底部は平坦で、体部は直線的に上方へのび口縁部はわざりに外側する。脚部は近く大きく外反しながら広がり、肩部はわずかに下方に向曲する。体部には洗盤が2本めぐる。	口縁部から体部上半は外腹沈線の施文後ヨコナギ。底部外腹は3次引張りヘラケナギ。内面はナギ。脚部は内外面ヨコナギ。	粘土や粗。1～3mm大の砂粒わずかに含む。他成普通。淡灰色。口縁部～体部2/3、底部4/5、脚部2/3欠損。
(奈良原塚 集中区)	8	須恵器 高杯	脚径 (8.0)	脚部は直線的に外へ屈曲し、下方に向曲して引き出される。	环底部外腹はナギ、内面は多方向の仕上げナギ。脚部は外腹ヨコナギ。	粘土質。1～2mm大の砂粒含む。他成普通。淡黒褐色。脚部は上欠損。脚部1/3、脚窪部2/3欠損。
	9	罐	體高 31.5	体部は上にいくほどやや倚曲しながらすぼまる。底はほぼ水平にのびる。底から茎孔までの幅。並孔の形は横丸形に近い。	円筒形体部上半は斜め方向のナギ、下半は縱方向のナギ。茎孔の縁部は横方向のナギ。脚部のナギは無い。内面体部上半は縱方向のヘラケズリ。底口内面はヘラケズリ。	粘土や粗。1～3mm大の砂粒多量に含む。赤褐色色斑比較的多量に含む。他成良好。内面赤褐色。外腹淡褐色。足部分約2/3、体部上半約1/3欠損。
	10	土製支脚	底径 (11.7)	頂部に2本は無い、1本は無い把手を持つ。11は底部にえぐりがあるが、12は平整。	体部は縱方向のナギ。体部下端は横方向のナギ、指紋圧痕がみられる。	粘土質。1～3mm大の砂粒比較的多量に含む。赤褐色色斑比較的多量に含む。他成良好。内面赤褐色。外腹淡褐色。足部下約1/2欠損。

出土位置	No.	種類	法量(cm)	形 勿	手 法	粘土 他成 色調 粘合度
周溝上層 (灰青陶器 集中部)	12	土製支脚	底径 (12.0) 高さ (12.5)		底部・把手附近は横方向、体部は腰方 向のハラケズリ。底部には軽目模様。	粘土質。1~5mmの大粒砂粒比較的多量に 含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。燒 成良好。底赤陶色。把手2本。体部下端 1/3欠損。
	13	奈良期腰	口径 (28.0) 最大胸径 (27.5)	基本的に口縁部は外反して外に開き、体 部は球形。口縁部が長いもの13~18、 21~24・25、短いもの20・21・23、短く 横方向に開くもの19~26の差がある。 また24~26は越入腰位置が腰部にある。 15は体部上半に2条の不整な沈線が施 される。	基本的に口縁部はヨコナギだが、21~23 の口縁部内面に横方向のハラケメ調節が ある。体部外表面は上平を横方向のハラ ケメ。下手を折りへ腰方角のハラケメ調節す る。16・18・25・26はハラケメ調整した後 ナメ。体部内面は13が開閉部以下腰方角 のハラケズリ。他の腰部中位以下を腰方 角のハラケズリした後、腰部直下で腰 方角のハラケズリする。	粘土や粗い。1~3mmの大粒砂粒多量に 含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。燒 成普通。底赤陶色。口縁部・体部下端1/3 欠損。
	14	口径 26.1 最大胸径 (34.7)				粘土や粗い。1~3mmの大粒砂粒多量に 含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。燒 成良好。底赤陶色。口縁部・体部下端1/3 欠損。
	15	口径 (25.4) 最大胸径 (23.3)				粘土や粗い。1~3mmの大粒砂粒多量に 含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。燒 成普通。底赤陶色。外側全体下部手原付管。 口縫部1/2、体部上半1/3左右。
	16	口径 25.2 最大胸径 (23.5)				粘土や粗い。1~5mmの大粒砂粒多量に 含む。赤褐色粒子含む。燒成良好。赤褐色。 外側口縫部以下厚付部。体部下半欠損。
	17	口径 25.3 最大胸径 (25.0)				粘土や粗い。1~3mmの大粒砂粒多量に 含む。赤褐色粒子含む。燒成良好。赤褐色。 内外腹とも風化現象。体部下半欠損。
	18	口径 25.1 最大胸径 (24.0)				粘土や粗い。1~3mmの大粒砂粒多量に 含む。赤褐色粒子含む。燒成良好。赤褐色。 口縫部1/2、体部下半1/3左右。
	19	口径 (31.9)				粘土や粗い。1~4mmの大粒砂粒比較的 多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。 燒成普通。底赤陶色。口縫部1/4欠損。
	20	口径 (22.7)				粘土や粗い。1~4mmの大粒砂粒比較的 多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。 燒成普通。底赤陶色。口縫部1/4欠損。
周溝下層	21	口径	(27.5)			粘土や粗い。1~7mmの大粒砂粒比較的 多量に含む。赤褐色粒子比較的多量に含む。 燒成良好。褐色。体部下半欠損。
	22	口径 (24.0) 最大胸径 (23.2)				粘土や粗い。1~3mmの大粒砂粒比較的 多量に含む。赤褐色粒子子らずに含む。燒 成良好。褐色。外面口縫部以下厚付管。 口縫部1/2、体部下半無に窓孔。
	23	口径 22.0 最大胸径 (22.3)				粘土や粗い。1~3mmの大粒砂粒比較的 多量に含む。赤褐色粒子子らずに含む。燒 成普通。底赤陶色。内面墨 ずむ。口縫部1/2、体部上半4/5窓孔。
	24	口径 (21.3) 最大胸径 (23.4)				粘土質。1~3mmの大粒砂粒多量に含む。 赤褐色粒子比較的多量に含む。燒成良好。 茶褐色。口縫部1/2窓孔。
	25	口径 (28.5) 最大胸径 (23.0)				粘土や粗い。1~3mmの大粒砂粒比較的 多量に含む。燒成普通。底赤陶色。口縫部1/3窓孔。
	26	口径 (29.4) 最大胸径 (25.0)				粘土や粗い。1~4mmの大粒砂粒比較的 多量に含む。燒成良好。底赤陶色。口縫部1/4、 体部下半無に窓孔。
	27	土製塔 小型丸底壺	口径 7.8 最大胸径 8.8 高さ 8.7	口縫部は上外方に直線的に開く。口縫部 は丸くおさめら。体部は扁錐形。27は 底部に成後後の4×0.5~0.9cmの穿孔が 外側から施される。	口縫部内外面ヨコナギ。体部外側は底部 小付管を横方向、底部は斜め方向のハ ラケメ調節。底部内面ナギ。底部内面側面 のハラケズリ後衝撃圧痕。	粘土質。1~2mmの大粒砂粒を含む。赤褐 色粒子を含む。燒成普通。底赤陶色。口 縫部1/5欠損。
	28		口径 (6.0) 最大胸径 7.5 高さ 6.2			口縫部内外面ヨコナギ。体部外側底部以 下斜め方向のハラケメ調整後、底部下位横方 角のハラケメ調節。体部内面ナギ。

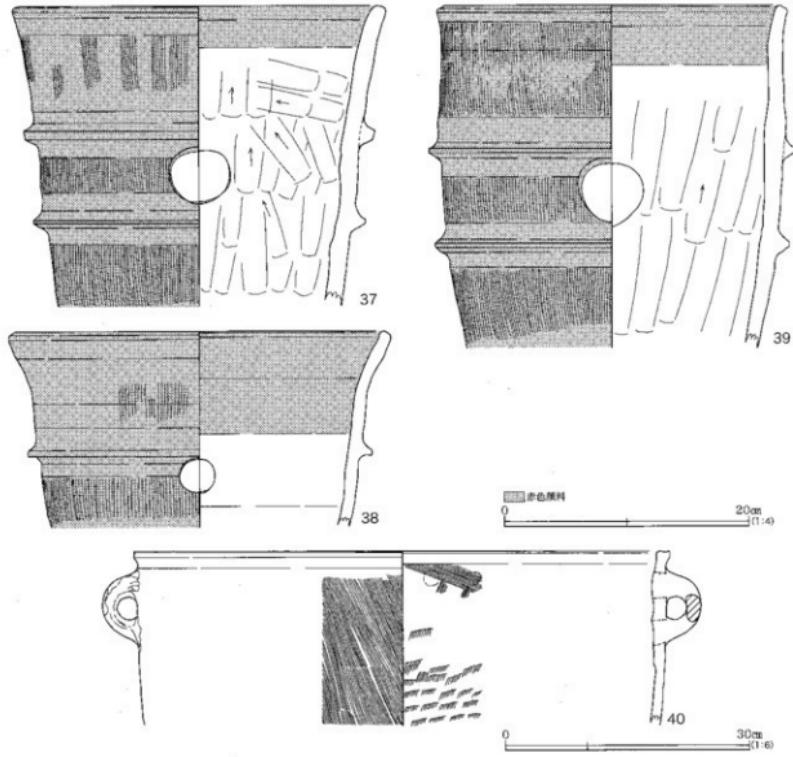


第16図 1号墳周溝上層出土遺物2



第17図 1号墳周溝下層出土遺物 I

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	鉢土、模成、色調、遺存状
周溝下層	29	土師器 小型丸底盤	口径 5.6 最大側径 6.0 高さ 5.3	口縁部外面ヨコナデ。脚部外沿中位以下ハケメ。脚部内面横方向のヘーケズリ。	粘土質。1cm大の砂粒を含む。焼成良好。淡赤褐色。底部・底面約1/3欠損。	
	30	土師器 盤	口径 (16.5) 最大側径 (25.0) 高さ (26.0)	口縁部は外反し、体部は球形。口縁部はなく、縦型外側は無いヨコナデにより盤壁を薄くする。	粘土質。1～4cm大の砂粒多量に含む。焼成良好。模成済。口縁部～盤面にかけ1/3欠損。	
	31	土師器 鉢	最大側径 (23.0) 底径 (8.5)	体部は脚部よりで強く屈曲する屈膝形で底部は平たい。	粘土質。外縁部ヨコナデ。外縁部と脚部前方のハケメ後ナデ。内縁部以下脚部前方のヘーケズリ、脚部直頭近底、底部伸状工具による乳状孔。	粘土質。1～3cm大の砂粒多量に含む。赤褐色粒子わずかに含む。焼成良好。淡白褐色。唇部～底部1/3欠損。
32	土師器 杯	口径 (11.8)	丸みをもつ底部から、口縁部はやや内湾しながら丸たるがる。底部は丸みをもじる外側にやや凹面をなす。底部外周には中央点が現れる。	口縁部内外ヨコナデの後、内面に横方向のヘーミガキを施し、さらに底部に放射状のヘーミガキ。外縁はナダダが底部中央を一向向のヘーケズリする。	粘土質。1～2cm大の砂粒含む。焼成良好。淡白褐色。1/2欠損。	
33	土師器 高杯	口径 (16.5)	口縁部は口状で浅い。口縁部は小さく角張り地盤は凸面をなす。脚部は上位が先ずばかり下位が下方に開く柱状脚と外方に大きく開く脚部からなる。	外縁外側面方向のハケメ後ナデ、内面腹方向のヘーミガキ後ナデ。柱状部外側面取り付けのヘーミガキ。内面斜め方向に打撲。	粘土質。1～2cm大の砂粒を多量に含む。焼成良好。模成済。白色。底部1/2欠損。脚部欠損。	
34		脚付	19.1	上位が先ずばかり下位が外方に開く柱状脚と外方に大きく開く脚部からなる。脚部は角張る。	柱状部外側面取り付けのヘーケズリ後ナデ。底面外周ナデ。内面斜め方向のハケメ。	粘土質。1～2cm大の砂粒を含む。赤褐色粒子を含む。焼成不良。淡黄褐色。手筋欠損。
35	土師器 杯			底部は扁平で、受盤は外上方へのび、脚部は長い。	体部内面に同心円タクツイ文様がある。底部内面にナデ。底部外側は時計回りのヘーケズリ。	粘土質。1～4cm大の砂粒含む。焼成良好。淡青灰色。体部から底部1/3欠損。



第18図 1号墳周溝下層出土遺物2

(注意()は推定値)						
出 土 位 置	種	形 標	法 量(cm)	形 态	手 法	胎土 成土 色調 產存度
周溝下層	36	重唇輪底	最大幅径 (10.2)	基部はややなだらかで、底部はのみをおびる。腹部に2条の凸縦筋を施文後、沈刷の間に波状文をめぐらせる。腹部にも波状文である。	底部外縁平行タキ。底部内面に突き込み部がある。	胎土底。1~4mmの大砂粒を多く含む。黒褐色顔料多量に含む。施成良好。肩部外側及び底部内面自然剥離かかる。灰褐色。粗縞1/5。体部から底部1/2遺存。
	37	円筒輪底	口径 (29.1)	2条の凸縦筋をもつ。体部は外側する。器壁が厚手のもの37・39とやや薄いものの38の2種類がある。39の口縁部は大きく外反する。突唇の断面は横楕である。透かしは円形で、2方に設けられ、上方の突唇の直下から穿孔される。37・39は大きく、38はやや小さい。	38は断面が丸い。明らかではないが、他の3品は底方角のハケメ調整をした後、口縁部を貼りつけ、その後は調整されない。内面は底方角のハケメの後、口縁部をヨコナメする。37・39は外表面及び口縫の突唇の内面に、38は外表面及び口縫の突唇の内面まで赤色顔料が塗影される。	胎土底。1~4mmの大砂粒を多量に含む。赤褐色顔料含む。施成良好。外表面黒褐色有り。基底部欠損。口縁部~体部1/2欠損。
	38		口径 (30.3)			胎土底。1~5mmの大砂粒を多量に含む。赤褐色顔料含む。施成良好。外表面黒褐色有り。基底部欠損。口縁部~体部1/2欠損。
	39		口径 (27.5)			胎土底。1~3mmの大砂粒を多量に含む。赤褐色顔料含む。施成良好。白褐色。外表面に黒斑有り。基底部欠損。口縁部~体部1/3遺存。
	40	瓶形土器	口径 (65.7)	大型。円筒形で下方が狭くなる。口縁部カット。上部に縦状の難状把手を1対つける。	口縁部内外斜傾方向のハケメナデ。肩部内外正規方向のハケ。	3mm以下の砂粒を含む。施成普通。體色。口縫部1/3遺存。

2号住居

(法量()は推定値)

出 土 位 置	No.	器 標	法 量(cm)	形 狀	手 法	施 土 成 形 色 調 速 度
埋土	77	土器蓋 小型台付蓋	最大直径(3.3)	仰部はやや肩の張る球形。底部は丸く廣じ、外側へ開く台脚に横く。	体部外面は横方向のハケメ。内面底部のあたりまでナギ。それ以外は横方向のハラケメ。	粘土質。1~2mm大の砂粒含む。焼成良好。褐色。台脚内面に白色の糊状物のもの仕上。仰部1/3進存。
床面	78	土器底 甌	口径 (15.1)	口縁部は退化した二重口縁で、外反底にたちあがり端部外側に面をして肥厚する。端面は鉛直面をなす。	口縁部外面ヨコナギ。外底面部～周部にかけて内反方向のハケメ後底面横方向のハケメ。周部内面横方向へハラケメを施すが底面压痕残る。	粘土質。1~5mm大の砂粒を含む。赤褐色合む。焼成良好。底部白色。口径部1/2、周部1/6進存。
	79	土器底 甌	口径 (25.2)	坪部と底部との境界で内折し、外反する口縁部。口縁端部は鉛直面をなす。	坪部内面ヘラミガキの可能性有り。	粘土質。1mm大の砂粒を少量含む。焼成普通。底部白色。底部1/4進存。周部欠損。
	80	瓶形土器 詰甌	(66.7) (17.1)	大型、円筒形で、底盤がすばりタグ状の突起がつく。上部に腰部の輪状把手を1対、下部に腹部の輪状把手を1対つける。	口縁部、底部内面ヨコナギ。周部外面糊ハケ。周部内面横ハラ。	5mm以下の砂粒を含む。焼成普通。褐褐色。口縁部1/3、底部1/2進存。

1号柱立柱建物

(法量()は推定値)

出 土 位 置	No.	器 標	法 量(cm)	形 狀	手 法	施 土 成 形 色 調 速 度
P 7	61	土器脚裏 底盤	口径 (17.2)	口縁部は直立する二重口縁で、口縁内部は角張り、内面に面をなす。底部はヨコナギにより引き出された長い。	口縁部外面横筋平行底後ナギ消し。底部内面ナギ。	粘土質。1~3mm大の砂粒を多量に含む。糊合む。焼成普通。底部白色。口径部1/8進存。

1号櫛列

(法量()は推定値)

出 土 位 置	No.	器 標	法 量(cm)	形 狽	手 法	施 土 成 形 色 調 速 度
P 2	55	漆器器 長柄匙		直線的に外へ開く。底部上方に枕頭が2箇めぐる。	枕頭を施文後、外外面ナギ調整する。体部と底部とのつなぎ目に削れ目残る。	粘土質。1~2mm大の砂粒わずかに含む。焼成良好。外間に灰がかかる。底部灰化。口縁部及び体部粗面。

2号櫛列

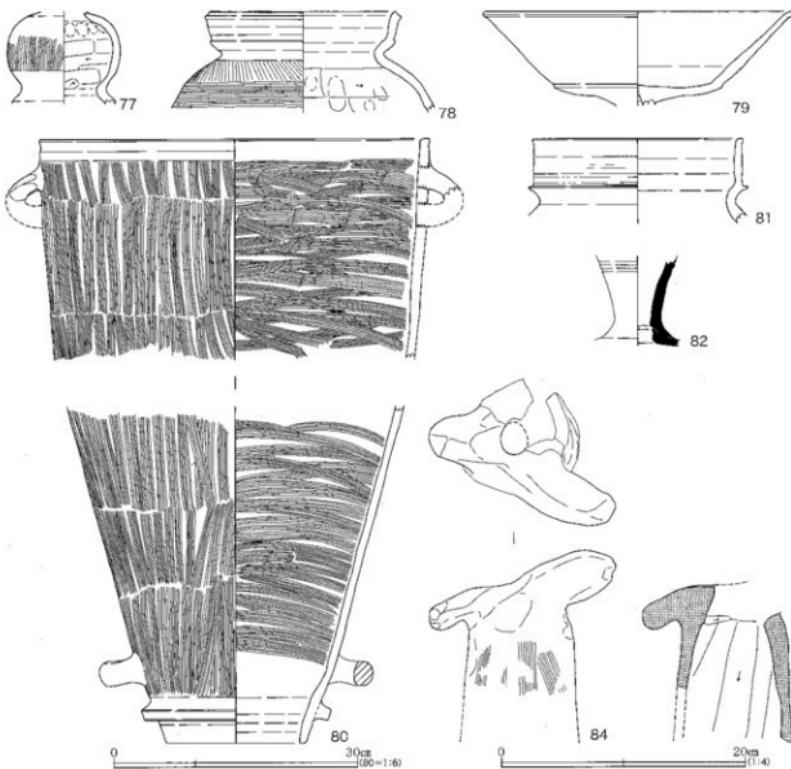
(法量()は推定値)

出 土 位 置	No.	器 標	法 量(cm)	形 狽	手 法	施 土 成 形 色 調 速 度
P 6	84	土器支撑		底部に長い把手2本、短く上部につぶれたような把手を1本もつ。底部には焼成前の穿孔がある。体部は空窓で、わずかに下に向かって広がる。	底部はおもに横方向のナギと衝頭研磨。空窓部分はナギされる。体部外表面は糊かしの筋方向のハラメ後ナギ、内面は糊方向のハラケメ。	粘土質。1~3mm大の砂粒多量に含む。焼成良好。底面から白褐色。底部から体部2/3進存。

1号・2号溝状遺構

(法量()は推定値)

出 土 位 置	No.	器 標	法 量(cm)	形 狽	手 法	施 土 成 形 色 調 速 度
2号燃木	85	漆器器 蓋	口径 (7.2) 高さ 1.9	天井部は扁平で、腹底膨脹のつまみをもつ。かえりは口縁部より幅広でわざかに突出し、太く削る。	口縁部外面ヨコナギ。天井部外面は反時計回りのハラケメ。	粘土質。1mm大の砂粒比較的多量に含む。黒色糊質比較的多量に含む。糊合む。表面が黒い。
	86		口径 (15.0)	口縁部は断面三角形状にわざかに下へのびる。	口縁部外面ヨコナギ。	粘土質。1mm以下砂粒含む。黒色糊質比較的多量に含む。焼成良好。外表面凹凸をもつ。底灰色。口縁部1/3進存。
2号櫛土	87			腰伏つまみをもつ扁平な器。底の口部は下へのびる。底の天井部外周に突き出る内面に「V」字形に2箇を単位とした側突起がめぐる。	口縁部外面ヨコナギ。天井部外側は反時計回りのハラケメ。	粘土質。1mm以下砂粒含む。底灰色。内面底青灰色。外表面紫朱紫色。
	88		口径 (14.5)		内面は上げげず。	口縁部内面ヨコナギ。天井部内面時計回りの粗な糊跡を残す。
P 4	89	漆器器 甌	口径 (12.5)	底部はやや外反しながら外に開き、たちあがりは内側曲す。たちあがりと受器の接に長い直筋がめぐる。	口縁部外面ヨコナギ。底部外表面は反時計回りのハラケメ。	粘土質。1mmの砂粒わずかに含む。焼成良好。内面ボロ付。底青灰色。口縁部1/2、底部ほとんど欠損。



第19図 2号住居、1号掘立柱建物、1号・2号柵列出土遺物

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土 構成 色調 留存度
検出層	90	須恵器 高台付环 飾面	口径 (14.5) 脚径 (7.5) 厚さ 4.4 奥行	体部はゆるやかに両側しながら外へ開き、 底部から口縁部、高台部分内外面ヨコナ ダ。口縁部はわずかに外反する。高台は薄く、 底部内面は仕上げナダ。	胎土質、1mm以下の砂粒わずかに含む。 構成粘土質。内部灰青色、外因青灰白色。 口縁部0.4、底邊0.5mm厚。	
2号埋下層	91	(軽石模)	鉢径 (3.1)	細い高台が、外へ張り出す。底部内面が 側に転写される。転写内面に朱墨の痕跡 が残る。	底部外面反時計回りのへら切り後ナダ、 内面多方向の長い単位の仕上げナダ。高 台部分内外面ヨコナダ。	胎土質、1mm以下の砂粒わずかに含む。 構成粘土質。高台部分特に軟質。淡灰 色。口縁部、高台1/2欠損。
2号柵最下層	92	上部器 皿	口径 (16.5)	体部から口縁部にかけてゆるやかに内凹 する。端部外縁にわずかに凹みがめぐる。	底部内面ヨコナダ。体部内面堅密平 滑。	胎土質、淡灰土質。内外面赤褐色顎垂形。 口縁部1/3遺存。
2号埋土	93	甌		底は横方向にびらん。蓋孔は遺存してい る部分はやや痕跡的である。	甌口。体部内面はヘラケズリの後ナダ。底 部は横方向のハケメの後ナダ。ハケメは 無い。	胎土質、1mm以下の砂粒多量に含む。 赤褐色粘土質。表面灰れ。淡褐色から赤褐色。
P 6	95	平瓦	厚さ 1.4~1.9		凸面は格子目叩き。凹面は通常に磨滅し てている。	胎土質。1~3mmの砂粒わずかに含む。 構成粘土質。白灰色。

1号段状遺構

(法量()は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(m)	形態	手法	鉄土 烷成 色調 連存度
埋土	96	土師器 小腹丸底壺	口径 (6.0) 最大胴径 7.5 高 6.8	口縁部は外上方へまっすぐ開く。底部はやや絞りで最大胴径位は低い。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面はナデだら中筋あたりに指輪正位がある。底部外面は基本的に一方向のハケ。	鉄土質。焼成良好。淡褐色。口縁部1/2欠損。底部から底部わざに欠損。
埋土上層	97	土師器 壺	口径 (13.4)	口縁部は近く、縁部は凹み、外側に肥厚する。底部は筒形で、上部に沈没している。体部は腰が張り、焼成後瘦れられる。肩部外腹に棒状工具による刺突孔2個有り。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半は横力方向のハケメだが、最大胴径位は方向がやや乱れる。内面底部から腰部のあたりまでナデで締り日、指輪正位が残る。体部内面は軽く方向のハラケメりだが、ケズリの位置は低い。	鉄土質。1~2mmの大砂粒含む。焼成良好。淡褐色。外面部以下保付着。口縁部1/2、底部へ体部1/3連存。
	98	土師器 壺	口径 (12.2) 最大胴径 (13.4)	口縁部はわずかに内側しながら外腹する。口縁部は内外に折をもつ。体部は腰が張る。肩部外腹に棒状工具による刺突孔1個有り。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面は腰力方向より下は多方角のハケメ、上は腰力方向のハケメの後横力方向のハケメ。体部内面は底部の下より最大胴径位まで横力方向のハラケメり。	鉄土質。1~6mmの大砂粒を比較的多量に含む。赤褐色粒子数比較多量に含む。焼成良好。淡褐色。外面部に縁部以下保付着。口縁部へ体部1/2連存。
	99	土師器 壺	口径 (16.0)	口縁部は外折する二重口縁。腰部は外傾する面をなし、外側に斜厚する。肩部の腹はやや大きい。底部はなだらか。	口縁部内外面ヨコナデ。腰部内面ナデで横力方向残る。体部外腹は斜め方向のハケメ、内面は横力方向のハラケメり。ケズリの位置は底部に近い。	鉄土質。1~3mmの大砂粒含む。焼成良好。淡褐色。外面部以下保付着。口縁部へ肩部1/4連存。
	100	土師器 壺	口径 (20.0)	浅い直底の壺部。口縁部は角張り、外側に面をもつ。肩部はむち。	外腹及び口縁部内面は斜め方向の軽いハケメの後ナゲ窓跡。内面底部から底部にかけては放状状のラミガキ有り。	鉄土質。1~2mmの大砂粒含む。焼成良好。淡褐色。外部1/3連存。

1号貯藏穴

(法量()は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(m)	形態	手法	鉄土 烷成 色調 連存度
埋土	101	赤生土師 壺	口径 (15.7)	口縁部は上方へ向く二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。	口縁部外腹は背板繋ぎによく平行筋を施す。内面ヨコナデ。肩部外腹ハケメと体部による押出文。内面横力方向のハラケメり。	1~2mmの大砂粒を含む。焼成普通。淡褐色。口縁部外腹付着。口縁部1/4連存。
	102		口径 23.0	口縁部はほぼ直立する二重口縁で口縁部は丸くおさめる。底部の腹は小さく丸く下垂する。	口縁部外腹は背板繋ぎによる平行筋。肩部外腹は押出文で、肩部外腹内面ヨコナデ。頭部内面横力方向のハラケメり。	鉄土質。1~3mmの大砂粒を比較的多量に含む。焼成良好。淡褐色。体部以下すべて欠損。
1号壙 西隅底部下層	103	赤生土師 壺	口径 19.5	肩部は丸みをもち、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部はやや内脇する。腰部との接合は口輪充満式である。	口縁部内外面ヨコナデ。肩部内面横力方向のハラケメり。	鉄土質。1~5mmの大砂粒を多量に含む。焼成良好。淡褐色。口縁部1/5欠損。肩部欠損。
	104		鋸底 15.7	ハバの字形に開き、底部はヨコナデによりさらに外反する。	底部内外面ヨコナデ。柱状部外腹横力方向のハラケメり後ナゲ。	鉄土質。1~5mmの大砂粒を多量に含む。焼成普通。淡褐色。底部欠損。

1号土壙

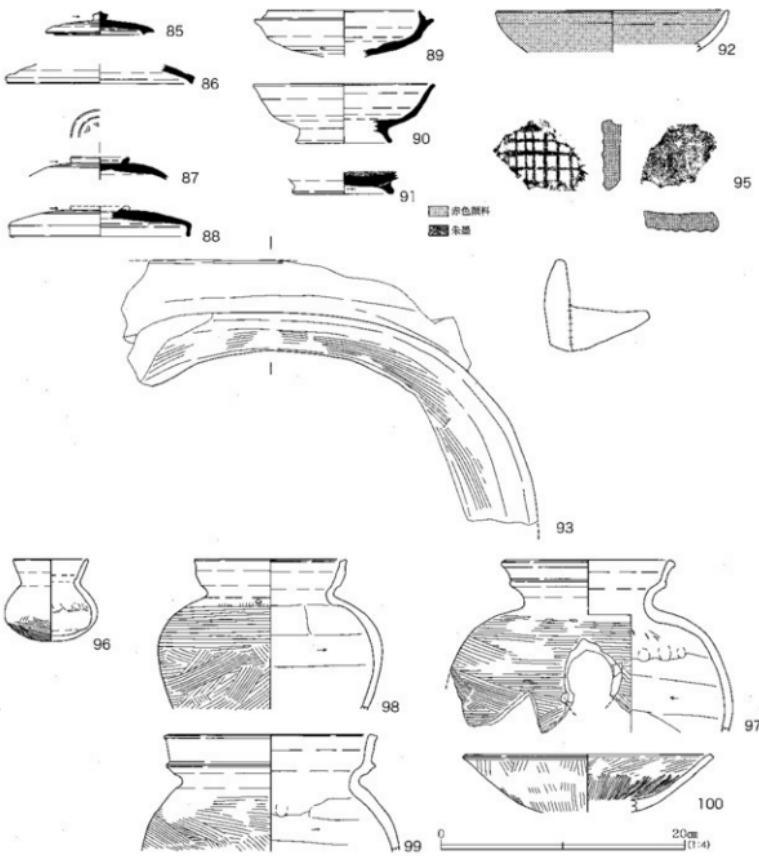
(法量()は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(m)	形態	手法	鉄土 烷成 色調 連存度
埋土	105	土師器 壺	口径 (16.0)	口縁部は退化した二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。105の肩部の腹は上部に折をもつて角張り。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外腹ハケメから肩部にかけて横力方向のハケメ。体部内面横力方向のハラケメり。	鉄土質。1~4mmの大砂粒を多量に含む。焼成良好。淡褐色。口縁部へ肩部1/5連存。
	106		口径 (15.9)		口縁部内外面ヨコナデ。	鉄土質。1~2mmの大砂粒を含む。焼成普通。赤褐色。

土器溜

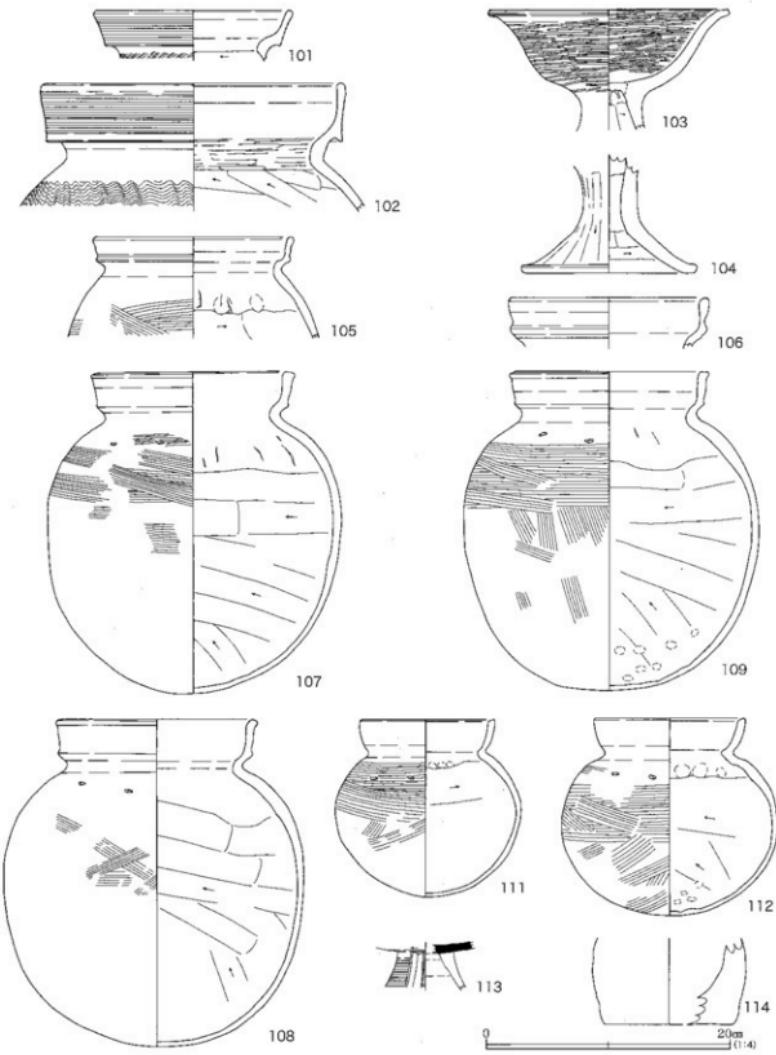
(法量()は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(m)	形態	手法	鉄土 烷成 色調 連存度
	107	土師器 壺	口径 15.4 最大胴径 23.9 高 29.6	口縁部は退化した二重口縁で107~108は外反肩部にたしかがり、108はほぼ直立する。口縁部は内面に筋をもして厚壁となる。107の肩部の腹はハバの字形に開き圓錐形となる。底部外腹は棒状工具による刺突孔2個有り。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外腹肩部から肩部にかけて横力方向のハケメ。体部内面横力方向のハラケメり。底部にケズリは及ばない。肩部斜り目残る。	鉄土質。1~4mmの大砂粒を多量に含む。赤褐色粒子含む。焼成普通。淡褐色。口縁部1/5欠損。底部へ肩部1/4連存。

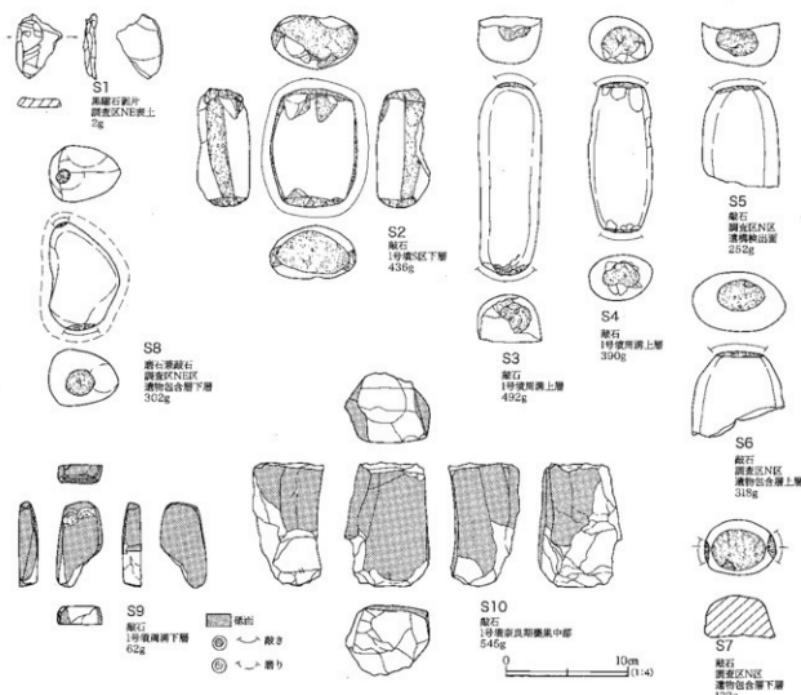
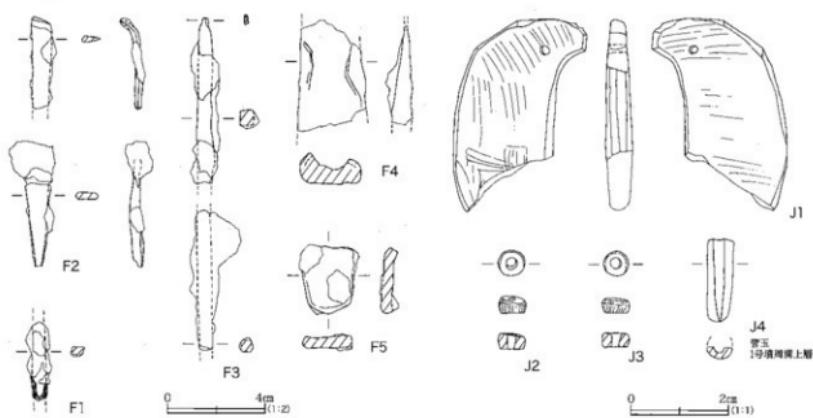


第20図 1号・2号溝状遺構、1号段状遺構出土遺物

（注意（ ）は推定値）						
出土位置	No.	器種	径幅（mm）	形 務	手 法	施土 塗成 白潤 保存度
土塗器 窓	108	口径 被大削径 留高	15.6 24.5 26.8		口部内外面ヨコナギ。肩部内外面ナギ。 側面外側削め方向のハケメ。内面斜め方 向のヘラケツリ。	粘土質。1～2mm大の砂粒を多量に含む。 施成普通。底白潤色。直縁わずかに欠損。
	109	口径 最大削径 留高	17.1 24.2 (25.3)		口部内外面ヨコナギ。外圓面削磨方向。 脚部削め方向のハケメ。内面斜め削磨方 向。底面削め方向のヘラケツリ。肩部にケズ リは及ばない。底面ヘラケツリ後圧縮。	粘土質。1～3mm大の砂粒を多量に含む。 赤褐色粒子を含む。施成普通。底白潤色。 底縁1/2欠損。
	111	口径 最大削径 留高	10.8 15.1 (14.7)		小型。口縁部は内側削めに外反するくの 字口縁で、口部端部は内側に面をなす。 全体削磨。肩部外側摩耗工具による剥 離2個有り。	粘土質。1～2mm大の砂粒多量に含む。 施成普通。底白潤色。全体外側摩耗材。 底縁わずかに欠損。



第21図 1号貯蔵穴・1号土壤・土器窓、遺構外出土遺物



第22図 鉄製品・玉類・石製品

出 土 位 置	No.	形 横 横	法 量(cm)	形 痕	手 法	土 壤 成 色 調 渡 度
	112	土器部 縫	口径 12.2 最大断径 17.7 縫高 15.2		口縫部内外面ヨコナナ。外圓部から縫部にかけて横方向、内圓部から底部にかけて斜めのハケメ。内圓部から底部にかけて斜めのハラケズリ。底部無鉛錠。底部棒状工具による圧痕。	粘土質。1~2mmの大粒砂を含む。赤褐色子わざに含む。微成良好。灰褐色。体部外底無付着。完形。

遺構外

出 土 位 置	No.	形 横 横	法 量(cm)	形 痕	手 法	(法量()は推定値)
西区NW区	113	須恵器 縫		縫の基底はやや太い。透しは三方。	环底部内面に同心円タキ目文残る。环底部外縁は反時計回りのハラケズリ。脚部外縁にはカギ目が施される。透しには更迭りが亂れる。	粘土質。1mmの大粒砂を含む。微成良好。灰褐色。所部分はほとんど欠損。表部上半部分1/5程度。
西区N区	114	土器部 縫	底径 (10.5)	底部は平底で、体部は上方にちぢみがあり、やや内傾する。縫跡は薄い。	底部に板目残る。基本的に内外面ともナゲ調整。	粘土やや粗い。1~4mmの大粒砂多量に含む。非同色粒子多量に含む。黒、土灰、灰等の粘土に似る。微成普通。灰褐色。体部から底部1/4程度。

IV まとめ

各遺構の時期 出土した遺物から各遺構の時期について述べる。まず、1・2号溝状遺構は、須恵器壺89の破片が2号溝状遺構(新)に伴うと考えられるP4から出土していることから7世紀前半には存在し、2号溝埋土の遺物から遅くとも8世紀前半には埋まり始めたと考えられる。出土した遺物の中に9世紀後半以降の遺物ではなく、廃絶はその頃と考えられる。

欄列は、ほぼ同じ方向であるため1号・2号とも大きく時期差はない、ピット内出土の須恵器長頸壺82の存在から7世紀後半代の遺構と考える。1号住居は2号欄列に切られること、住居埋土下層から奈良期壺の小片が出士していることからそれ以前の7世紀前半代が考えられる。

1号壇は、供獻状態で出土した遺物がなく嚴密には決められないが、周溝下層出土の土師器壺30・須恵器壺35・須恵器壺36などから6世紀前葉に製造されたと考えられる。1号壇頂部にある1号土壙からは、1号壇周溝下層とほぼ同時期の遺物が出土している。位置、形態から1号壇に伴う遺構とは考えにくく、1号壇築造時まで存続していた遺構と考えられる。2号土壙は、1号壇の埴丘部・周溝を削るように造られているため、1号壇より後出する遺構である。1号壇周溝内の奈良期壺集中部は周辺の須恵器2・3などにより7世紀後半代に位置付けられる。周溝上層の出土遺物の中には須恵器壺5など8世紀前半に降ると考えられるものもあり、明確な集中部をもたない周溝上層の奈良期壺・竈などは7世紀後半以降8世紀前半代に遺棄されたと考えられる。

2号住居・1号段状遺構・土器溜は5世紀後半代、掘立柱建物は古墳時代初頭、貯藏穴は弥生時代後期後葉から弥生時代末にかけての土器が出土している。3号・4号土壙の埋土は黒色土のみでII・II'層の茶褐色土系の土はみられなかった。黒色土の上のII'層は土器溜の存在から少なくとも5世紀後半以前の堆積であり、3号・4号土壙はそれよりさらに以前の遺構である。

祭祀遺物について 今回の調査で1号壇周溝上層から土器馬形4・猪形1・不明動物形1・土玉1・手捏土器48が出土した。周溝上層には7世紀後半以降8世紀前半の遺物が含まれる。祭祀遺物は周溝下層からは出土せず、同様の時期が考えられる。出土状況にはまとまりがみられず、置く・擲げるなどの行為を行った「場」や、その「状況」は今回の調査では推定できなかった。また、出土状況にまとまりがみられなかつたことと関連するのか、

出土した馬形の中でも目鼻を表現するもの43・44としないもの41・42の違いが認められる。

周辺の祭祀遺物出土遺跡の状況は、まず南隣の丘陵上に位置するクズマ遺跡第1次調査では、9基の古墳が調査され、丘陵の先端部にある3基を除く6基の古墳周溝内などから土製馬形・土玉・手捏土器などが出土している。丘陵頂部にある7号墳・8号墳が量的に他よりも多く、7号墳では周溝東側の埋土中に土製馬形6・手捏土器・奈良期甕・竈・土製支脚の集中部分がみられ、それらの中から7世紀後半の須恵器が出土している。また、7号墳と8号墳の間の平坦地（空白地）にも祭祀遺物の集中がみられる。同一丘陵の先端部に位置するイガミ松遺跡からは合計217点もの土製人形・馬形・竈形・有溝円板・器財形・手捏土器などが採取されている。^{註1)} 東隣の丘陵上には西山遺跡があり、6世紀代の堅穴式住居内から馬形・土製鈴が出土しているが、古墳群からは祭祀遺物は出土していない。さらに東隣に存在する谷畠遺跡には浅い谷部分に人形・馬形・不明動物形・鉤形・手捏土器などが集中して置かれたような状況で出土し、6世紀後半の時期が与えられている。それらの集中部から少し離れて、7世紀前半の土器と一緒に鏡形・土玉・手捏土器・甕・竈・土製支脚のやや粗な集中部分が検出された。^{註2)} 上神宮ノ前遺跡では、浅い谷部分に人形・馬形・鏡形・鈴・土玉・手捏土器・竈・甕・土製支脚などが廃棄されたような状態で出土している。猫山遺跡では、古墳周溝上面から手捏土器6点が出土している。^{註3)}

今回の調査で出土した土製品の種類は、イガミ松遺跡・谷畠遺跡・上神宮ノ前遺跡などにみられるような多種類ではなく、馬形・手捏土器を中心とした数種類に限定されているという点でクズマ遺跡1次調査に似る。近隣の丘陵上からの出土であり、1次と2次の出土の遺物は同様の時期が考えられている。しかし、クズマ遺跡1次調査出土の馬形はいずれも胴部が太く、馬具を表現しているのに比べ、2次調査出土のものは小型で、馬具が表現されないなどの違いが認められる。また、今回の調査では人形と思われる個体ではなく、猪形が出土しているなど組成も若干異なる。

時期、立地、限定された土製品の使用などの類似から、同質（種）の祭祀を復元することが許されるなら、その祭祀は、その場・その度ごとに器種構成・細部の表現などの幅をもち得る様式であるといふことができる。

西山遺跡や猫山遺跡の例にみられるように、周辺の他の丘陵上にはクズマ遺跡と同様の祭祀遺物はみられない。なぜこの丘陵がそのような特色を持つのか、今回の調査だけでは明らかにできないが、地形的みると、蜘蛛ヶ家山と四王寺山に挟まれた、上神地区の平野部の端に位置する、という特徴をあげることができる。

また、2次調査では1号墳周溝上層から、多量の奈良期甕・竈・土製支脚が出土した。これらの遺物は、同時期の1号・2号溝状遺構からは、底面の土壤内から滑石製白玉J3が出土しており、周囲の古墳群の埋葬施設さえも削平している可能性があることから、古墳の被葬者に対する新たな供獻という性格ではないと考えられる。

先述したクズマ遺跡1次・谷畠遺跡・上神宮ノ前遺跡などでも竈・甕・土製支脚が多量に出土している。竈については、出土例の多くが壊れた状態であることは、民俗例から「カマドは天帝の眷属で、毎年大晦日にその家の功罪を報告する役目があるため、カマドを壊し、役割を果たせなくするためではないか」とされている。今回の調査で出土した竈も、接合できた破片がわずかしかないほどに破碎されていた。

今回の調査では、竈などの出土の他に、甕・土製支脚のみの、竈を持たない集中部（1号墳周溝内奈良期甕集中部）を検出した。集中部は器種を選択し1箇所に置くという意図的な行為の所産である。しかし、他の3遺跡の例も今回の調査でも、竈と甕・土製支脚はそれぞれ分かれて出土しているのではなく、同様に破碎され、出土している。出土した器種はいずれも土器類の煮沸用具であり、他の供獻具はわずかしか供伴していない。そのことから、竈に込められる祭祀的な意味合いと、甕・土製支脚の出土する意味とを別系統に考えるのではなく、同じ火の神（カマド神）に対する祭祀であると考えたい。その中で、甕集中部は、単に使用時のセット関係を表しているだけなのかもしれないが、現段階では、煮沸用具の破碎遺棄とは違った「かたち」の存在を示すものとし

て理解してはどうだろうか。

1号・2号溝状遺構について 1号・2号溝状遺構底面の土壤列は「凹凸状波板」と呼ばれる、道状遺構にともなう安定した路面確保のための基礎工事だと考えられているものによく似る。2号溝の硬化した埋土はまさに「踏みしめられた」ような硬さであった。さらに、特に2号溝（新）の土壤列にみられるように、溝状遺構の底面が比較的硬いⅦ層白灰色粘質土の部分には土壤列は設けられず、軟質なVI'層黄褐色土の部分には設けられている点は、土壤列の持つ路面強化という目的に矛盾しない。土壤の具体的な目的は①土壤を人為的に硬く埋め戻しその上面を路面として使用する。②掘られた土壤を階段状に利用する。などが考えられている。しかし、今回の調査区内では溝状遺構底面（土壤上面）に強い硬化（①）は認められない。また、土壤列の中には底面もしくは埋土下層と上層の境目に土器・石の小片が敷いてあるような土壤があり、その面を人が足を掛ける面（②）と考えたとしても、土壤の断面形は人がつまずかずには歩けるほど緩やかなものではないなど、道路遺構と考えるにはやや不自然な点もある。この溝状遺構は今回の調査区内では一部分のみを確認したにすぎず、その追はさらに資料の増加を待って検討したい。

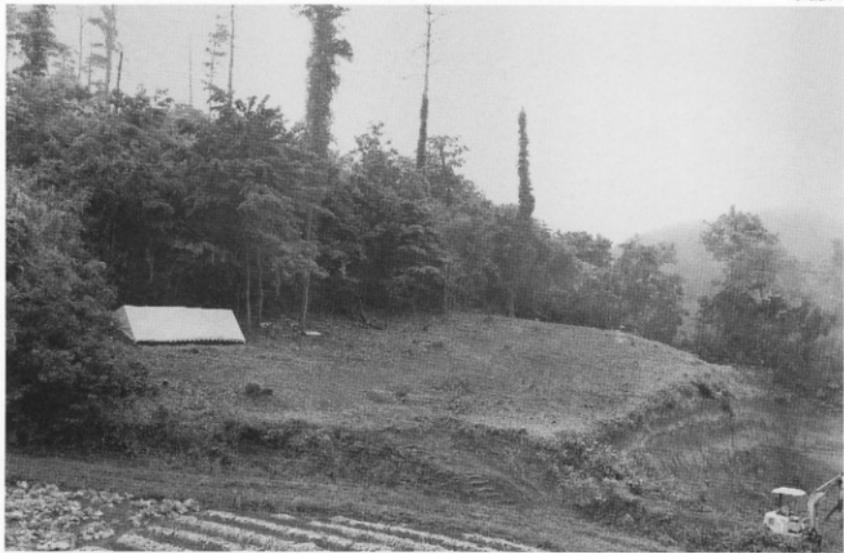
現在上神地区を谷沿いに走る県道倉吉・由良線が開通する明治時代以前は、倉吉方面からの道が今回の調査地とイガミ松遺跡の所在する丘陵を登り、山越えて倉吉市穴沢へ通じていたということである。そのことが祭祀遺物の出土や、溝状遺構の性格と直接関連づけられるわけではないが、興味深い事実である。土製品（いわゆる祭祀遺物）を用いた祭祀と煮沸用具を用いた祭祀との関係、その祭祀行為の具体的な様相、斎場の復元、また溝状遺構の性格など、残された問題は多いが、他の調査例との比較とその詳細な検討も含め今後の課題としたい。

註

- 1 真田廣幸 「鳥取県クズマ遺跡」『日本考古学年報39』1986年度版 日本考古学協会 1988
- 2 森下哲哉 「四王寺遺跡群 西山遺跡・桜木遺跡発掘調査概報」 倉吉市教育委員会 1985
- 3 土井珠美 「谷畑遺跡」『倉吉市内遺跡群分布調査報告書II』 倉吉市教育委員会 1985
- 4 加藤誠司 「上神宮ノ前遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1999
- 5 根鈴輝雄・竹中孝浩 『猫山遺跡第4次発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1993

参考文献

- 根鈴輝雄 「特別展 まつりの造形—古代形代の世界—」 倉吉博物館 1997
船田孝司 「忌の竈と王権」『考古学研究97』第25巻 第1号 考古学研究会 1978
『新編 倉吉市史』第1巻古代編 倉吉市 1996



△調査前全景(南から)

▽調査後全景(南から)

図版2



△ 1号墳(南西から)

▽ 1号墳周辺(南西から)

図版3

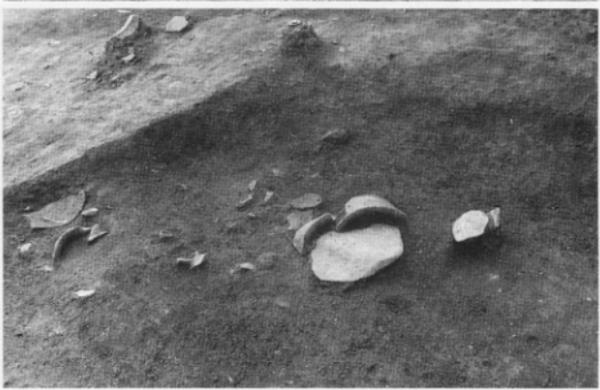
奈良期壺集中部(南西から)



(南東から)



(北東から)



図版4



不明土製品（46）出土状況

（東から）



土製馬形（41）出土状況

（北東から）



土製馬形（43）・猪形（45）

出土状況

（南東から）

土製紡錘車(49) 出土状況

(南西から)



1号墳北断面 (南西から)



調査区北壁 (南東から)



図版6



1号住居（南から）



2号住居（南東から）



貼床（南東から）

1号掘立柱建物

1号・2号柵列

(東から)



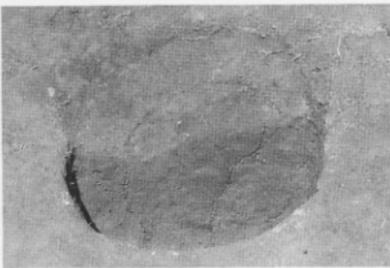
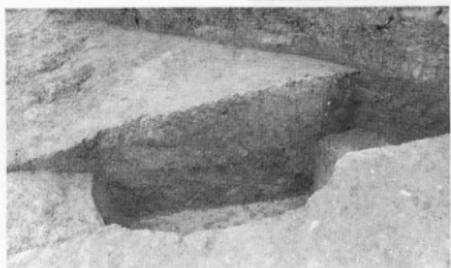
1号住居・2号柵列検出面

(南から)



2号柵列△P6断面(東から)

▷P5断面(東から)



図版8



1号・2号溝状遺構表面

(北東から)



(北西から)



完掘

(北西から)

1号・2号溝状遺構断面

(南東から)



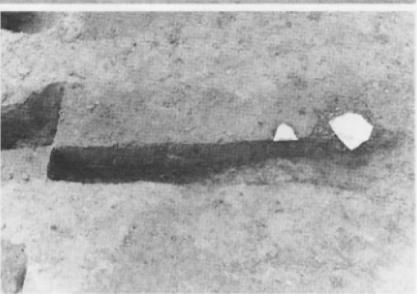
1号・2号溝状遺構断面

(北西から)



△P3・4・5断面 (南西から)

▷P5断面 (南東から)



図版10



3号溝状遺構断面 (南東から)



1号段状遺構 (北西から)



断面 (北東から)

1号貯藏穴

(南西から)

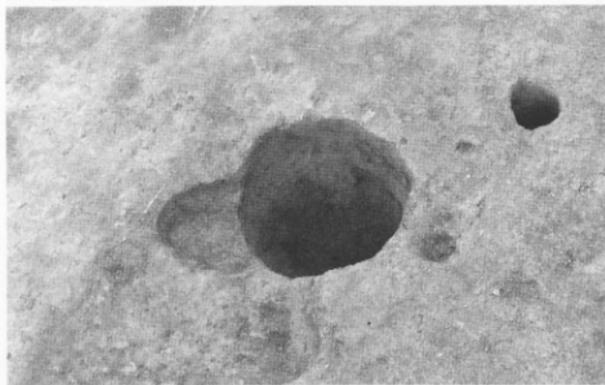


(西から)



1号土壤

(北東から)



図版12



2号土壤

(東から)



断面

(東から)



3号土壤半裁

(南西から)

4号土壤

(北西から)



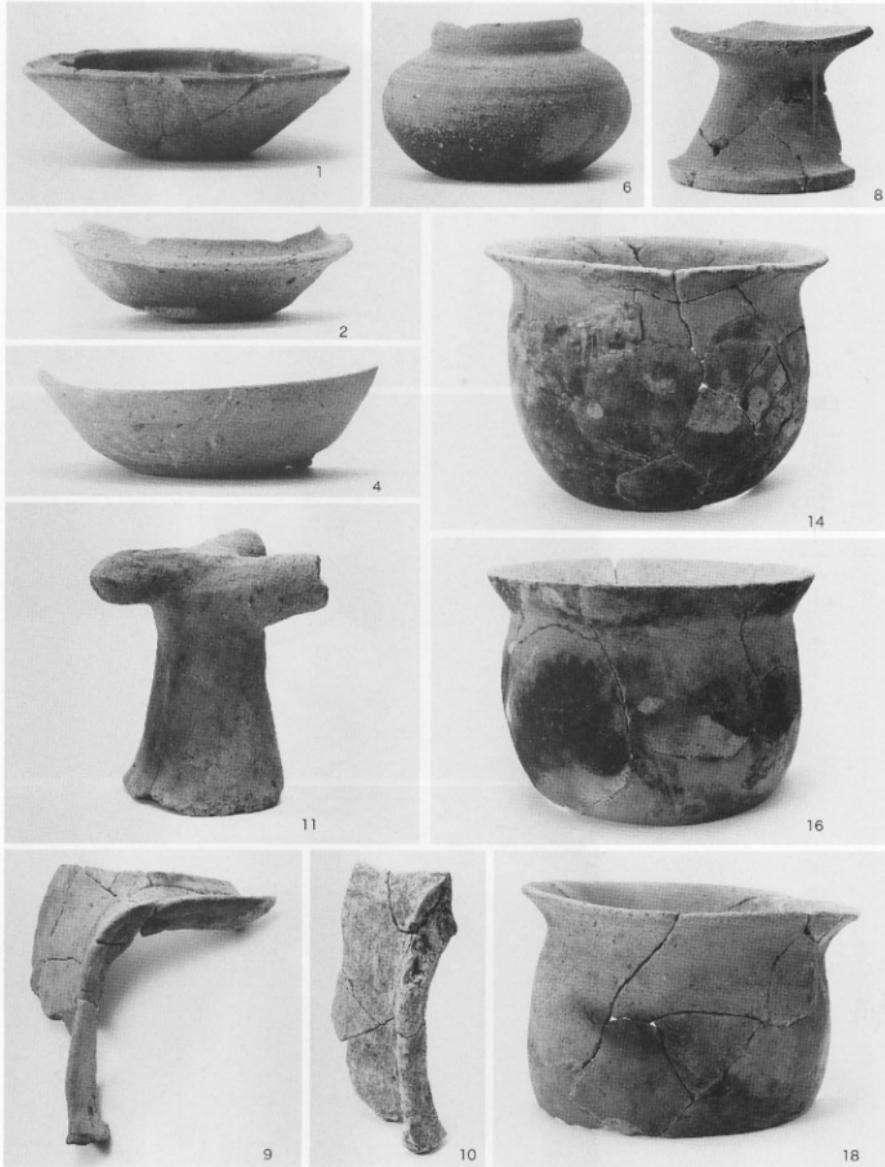
土器窯

(南東から)



(南東から)







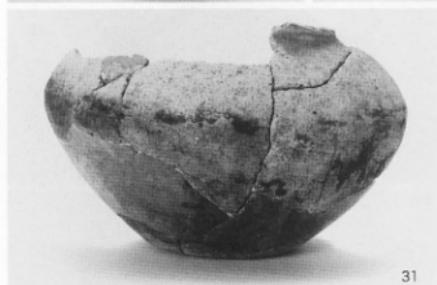
27



29



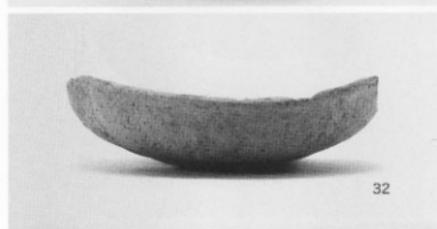
30



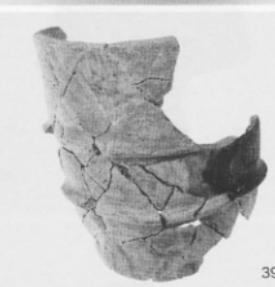
31



36



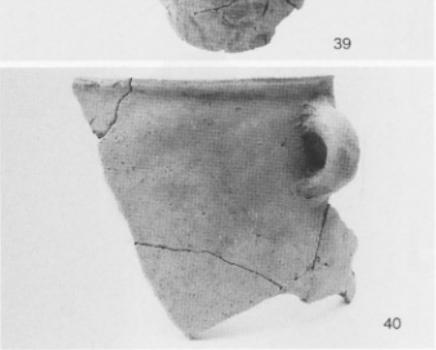
32



39



33



40



42



41



44



43



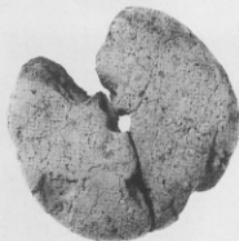
45



46



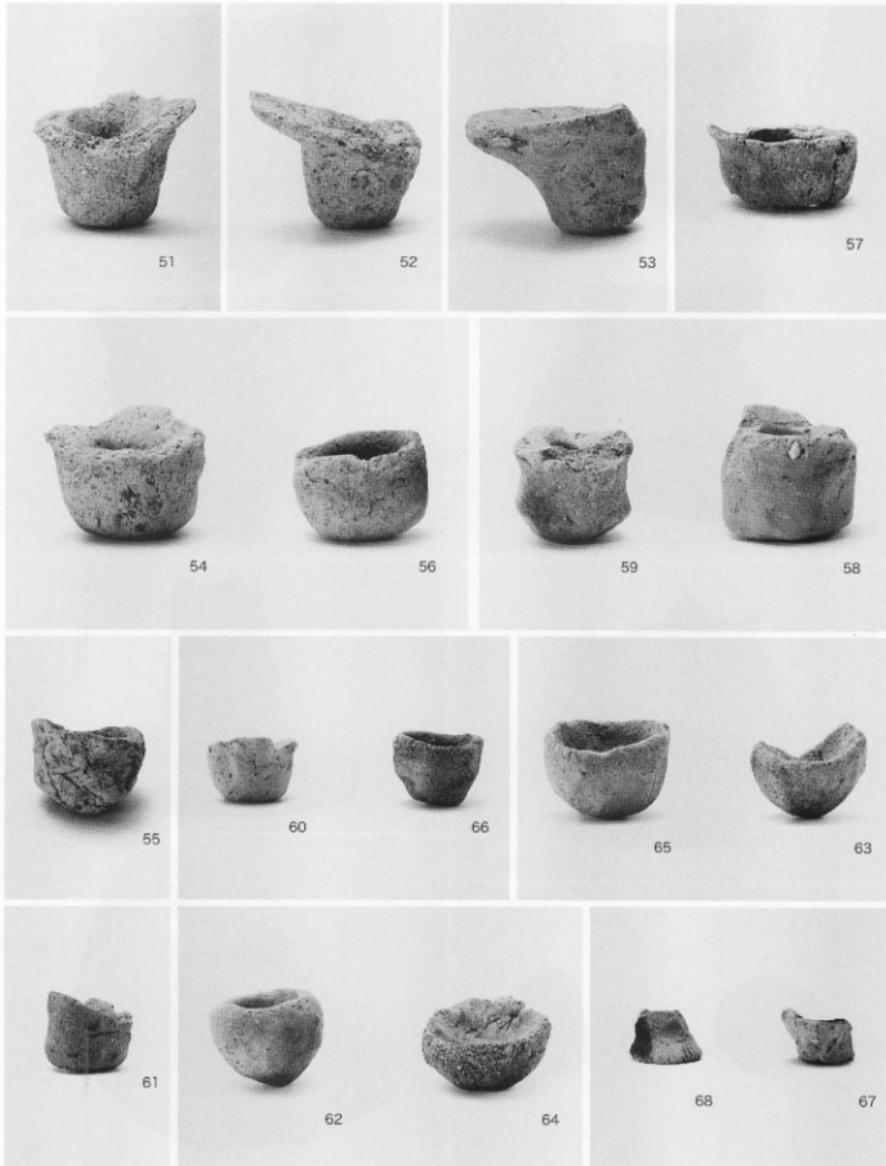
49



47



48





69



71



73



72



70



74



50



75



76



79



83



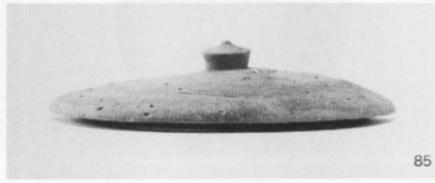
93



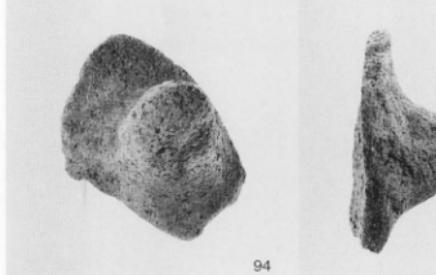
80



80



85



94



94



84



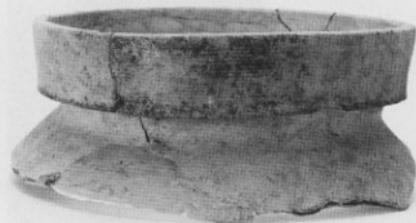
96



97



99



102



107



103



108



109



111



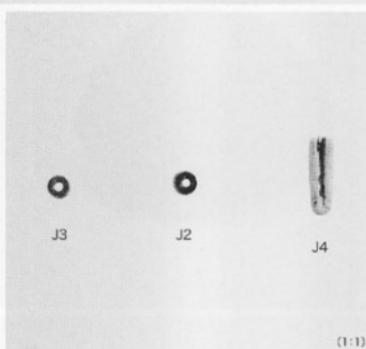
112



110



J1

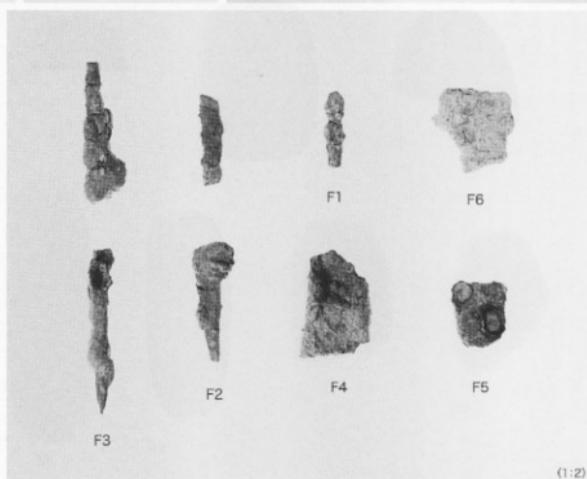


J3

J2

J4

(1:1)



F1

F6

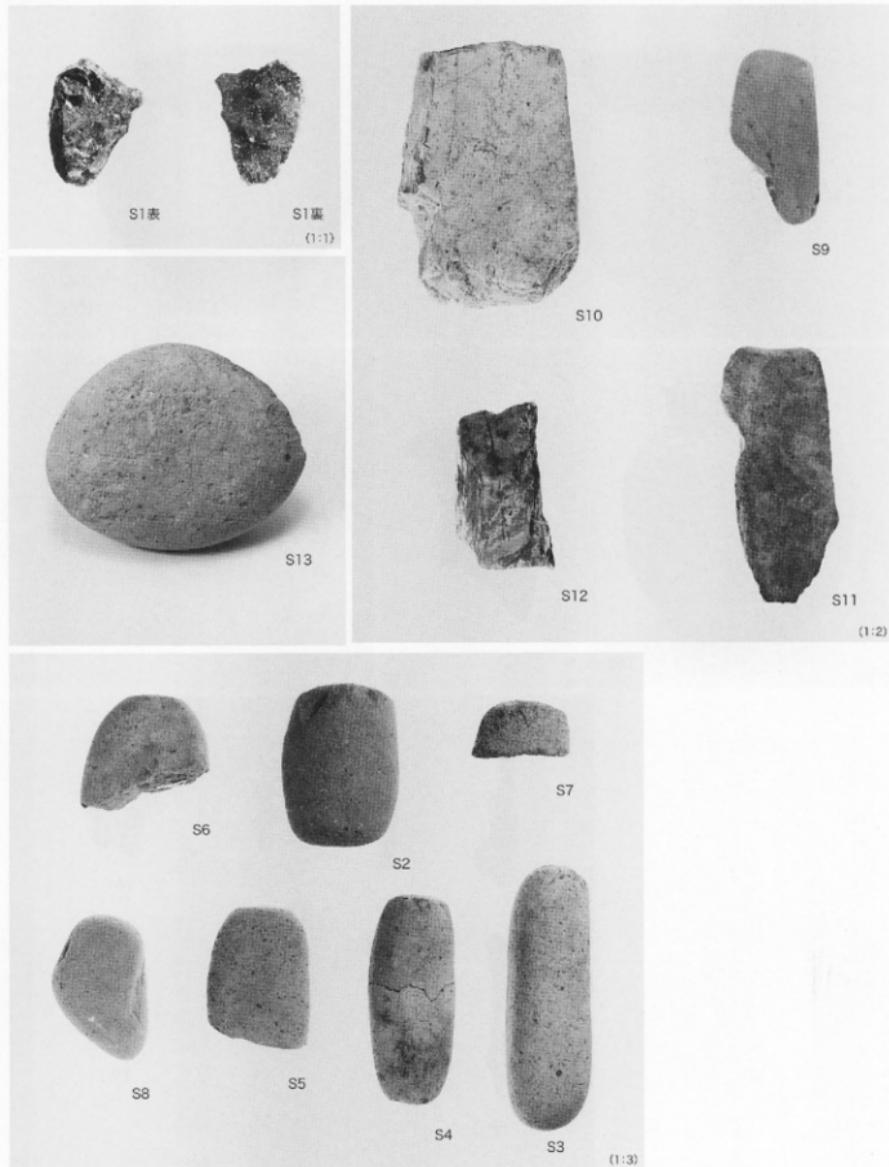
F2

F4

F5

F3

(1:2)



2-10.2
Kur
(104)
図書館

報告書抄録

審	名	タスマ遺跡第2次調査報告書							
調	査	名							
書	名	—							
卷	次	—							
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第104巻								
編著者名	岡平和也・加藤誠司・関本智尚								
編集機関	倉吉市教育委員会								
所 在 地	〒682-8611 島根県倉吉市美町722番地 TEL.0858-22-4419								
発行年月	西暦2009年3月21日								
所 収 済 諸 名	所 在 地	ヨーク	北	緯	度	調査期間	調査面積	調査原因	
タスマ遺跡第2次調査	倉吉市上林字タスマ	31203:4D KK-2	35° 27' 27"	133° 47' 36"	19990526~19991115	570m ²	個人の墳地造成		
所 収 済 諸 名	種 別	主な時代：主な遺構	主	な	遺	物	特記事項		
タスマ遺跡第2次調査	古 墓	野生：狩猟穴 古墳	1基 1基 1基 1基 2基 1基 2基 2基 2基	土製動物形・手挽土器・土製船形車・土玉 野生土器・土印器・須彌器・古代X 輪穴式住居 鐵頭・鍛斧・菅莖・白玉・磨石製瓦玉鏡高足 圓柱埴物 高麗石碑 磨石製鏡片・鐵石・磨石・施石 陶状遺構 古墳～原良：骨状遺構 櫛列	土製動物形・手挽土器・土製船形車・土玉 野生土器・土印器・須彌器・古代X 輪穴式住居 鐵頭・鍛斧・菅莖・白玉・磨石製瓦玉鏡高足 圓柱埴物 高麗石碑 磨石製鏡片・鐵石・磨石・施石 陶状遺構 古墳～原良：骨状遺構 櫛列	古世紀物めに造られた直径約14mの円墳調査内に、7 世紀後半以前、土製馬形・須彌・土印器、鐵形、土製 支脚などが発見される。それらの内、鐵・土製支脚が 1ヵ所に集中して置かれたような状態で出土した。			

クズマ遺跡第2次発掘調査報告書

平成12年3月21日 印刷
平成12年3月21日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会

印刷 製本 山本印刷株式会社
